

Title	増殖する言外の意：その共時的通時的様相と詩經解釋學史上の意義
Sub Title	The proliferating connotations : the synchronic and diachronic meanings of the Shijing's studies
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.29- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	長堀祐造教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20210331-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

増殖する言外の意

——その共時的通時的様相と詩經解釋學史上の意義——

種村和史

1 はじめに

筆者は前稿において、歴代の詩經注釋書および詩經に關する經說の中に見られる言外の意的認識の多様性を考察した¹⁾。その中で指摘したように、詩經解釋學史における言外の意認識については、黄忠愼氏の考察が重要である²⁾。特に、その「在『詩緝』裏說的『言外之意』有絶大部分其實都是聖人、國史的言外之意」³⁾は、嚴粲詩經學の特徴についての指摘であるが、廣く詩經解釋學史全體に適用して議論すべき事柄である。

黄忠愼氏の發言は、詩經解釋學において言外の意という問題は、詩篇を作った詩人の「意」に限定して考えるのでは不十分であり、詩經に關わる作者以外の諸々の人々の「意」も包攝して考察しなければならないことを示唆するものである。これは、北宋・歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）が「本末論」で論じた詩篇の意味の多重性の觀點を

言外の意の考察に導入したものとすることができる。筆者は黄忠愼氏の主張に基づいて、さらに詩經が儒教の經典として編纂され、尊崇され、解釋され、再解釋されてきたその歴史の全過程において見出だされてきた、詩句に表現された以外の一切の意味に考察の範圍を擴張することができるのではないかと考える。

つまり、詩經解釋學史においては、ちょうど太陽の周りを惑星が、惑星の周りを衛星が回っているように、多重な言外の意が、詩句に表現された事柄——いわば「言内の意」を取り巻いているイメージを持つべきなのではないだろうか。あるいは、樹木が年ごとに年輪を重ねてその質量を増していくように、詩篇も人々に讀み繼がれて歴史を積み重ねていくうちに、言外の意を一層また一層と纏っていくという成長のイメージを持つてもよいかもしれない。そのように言外の意を捉えることで、詩經解釋學史の中に現れた夥しい解釋を整序し、それらが生み出され、また別の解釋を生み出す母胎になったメカニズムを考察することができるのではないだろうか。詩經解釋學史研究に對するこのような言外の意の可能性を示唆したものとして、黄氏の指摘は極めて重要なものであると筆者は考える。

筆者は、このような考えに立って言外の意という視点から、詩經解釋學史を見直す作業を行っている。前稿では、言外の意の多様性を考察し、

(ア) 詩人が意識的に修辭技法を用いて生み出した「言外の意」

(イ) 詩人が無意識、無自覺に込めたものとしての「言外の意」、あるいは詩句に表現しきれない餘蘊としての「言外の意」

(ウ) 後世の人間が、詩篇からその原義に關わらない道德的意義を任意に讀み取ったものとしての「言外の意」、すなわち「斷章取義」

という三つの類型を得た。合わせて、黄氏の指摘を手掛かりにその相互の関係についても私見を提示した。ただし、その関係性についての分析はまだ概念的な假説に止まり、實證性に缺ける。また、言外の意の類型が右の三種で盡くされているとも思われない。本稿では前稿で得た知見をもとにさらに考察を深めるために、一篇の詩を取り上げそれに對する歴代の學者の注釋から、いかなる種類の言外の意が読み取られたか、その有様を見ていきたい。そしてそれらの言外の意がいかなる思路で生み出されたか、またそれぞれの言外の意が相互にどのような関係を持っているか、言い換えればどのような派生過程を経て多様な言外の意が導き出されたを分析したい。

前稿では、言外の意についての考察の起點を嚴粲『詩緝』に置いた。これは、黄忠愼氏の研究からも窺えるように、詩經注釋書において言外の意を術語として用い、本格的に詩經學の重要問題として取り上げたのは嚴粲を嚆矢とすると考えられるからである。しかし、嚴粲の言外の意的認識による解釋が彼の全く独自の發想であつたわけではなく、その解釋を生むに至つた解釋學史的な脈絡というものが存在していたことは前稿でも紹介した。本稿では、前稿において前史と位置づけた漢唐詩經學、朱熹などの解釋に正面から向き合い、それが言外の意認識を用いた解釋の歴史の中でどのような意義を持つていたかを考察したい。

とりわけ、朱熹『詩集傳』(以下、『集傳』と略稱)は嚴粲のカウンターパートという意味で興味深い。『集傳』は、元以降、科擧の標準テキストとなり絶大な影響を與へたことから、後世の學者もその枠内で、あるいは批判するにしてもその枠を強く意識して研究を進めなければならなかつた。朱熹自身はその詩經研究において「言外の意」という術語をほとんど使用せず、その意味で詩經學の重要な解釋概念とは認識していなかつたと推測されるが、しかしその注釋には事實上、言外の意的發想を用いて詩篇解釋を行った例が見受けられる。そのような解釋が後世の詩經學にどのように繼承されたかは、それ自體重要な意義を持つ問題である。

また、筆者は嚴粲の言外の意識が後世に大きな影響を與えたと考えているが、それもやはり朱熹詩經學という巨大な蔭の下という文脈で捉えられなければならない。元から明中期にかけての朱熹詩經學尊崇は詩經學の停滯を招いたとされることが多い。しかし、その停滯の中に發展變化の要素は全くなかったのであろうか。朱熹の提唱した詩經學が代々受け継がれる中で何らかの變容はなかつたのであろうか。朱熹の言外の意的解釋と嚴粲の解釋とがどのような關係を持っているか、あるいはどのような差異を持っているか、そしてそれらがどのように後世に受容されたか、これらは『集傳』獨尊の時代の詩經學の實像を考察するために恰好の視點を提供するであろう。

このような考察を行うことには次のような狙いもある。筆者はこれまで、清朝の戴震・翁方綱・陳奐などの學者による詩經の詩篇の解釋が、宋代詩經學の解釋理念・方法から影響を深く受けている様子を考察し、宋代詩經學と、そのアンチテーゼとしての側面を強調されることが多い清朝考證學の詩經學との間に學的繼承關係があることを論じてきた⁽⁵⁾。しかし、實際には南宋と清朝の間には最短でも三百六十年餘りの時間の隔たりが存在している。筆者のこれまでの考察はそれを捨象し、宋代詩經學の著述と清朝考證學的詩經學の著述という二點を比較したものであった。故に、その結論も概念的なモデルを提示するという性格が強かった。その實相を捉えるためには、宋・元・明・清の經說の脈略を丹念に辿ることが不可欠である。

ただ、この間の詩經學の蓄積は膨大で、かつ相互の關係も複雑な様相を呈しており、調べるのは容易ではない。手つかずのままに残してきたこの堆積を探るためには、考察の手掛かりが必要である。言外の意はそのためのよい導きの糸となるのではないだろうか。言外の意を巡る學說の繼承という觀點から、元代、明代の詩經注釋書の經說を分析することにより、宋代詩經學と清朝考證學の詩經學とがどのような經路で繋がっているかを考える材料を得られるのではないかと期待する。

以上のような問題意識を持つて考察を行っていくために本稿で取り上げる詩は、衛風「碩人」である。本詩について、元・朱公遷『詩經疏義』はその題下疏義に次のように言う。

哀傷悼惜、皆な言外に在り（哀傷悼惜、皆在言外）

詩人がこの詩を通して傳えたかった、大國齊の出身で衛の莊公の正夫人となった莊姜が美貌と婦徳を兼ね備えながら、夫に蔑ろにされ不幸な人生を送ったことに對する「哀傷悼惜」の思いは、本詩の詩句上には表現されることなく、すべて言外に込め隠されている、言い換えれば、本詩の詩句はすべて言外の意を讀者に悟らせるために存在すると、朱公遷は言う。これは、歴代詩經學者の本詩に對する問題意識を端的に要約した言葉である。

表現されたものと作者が傳えたかったものとの懸隔の有様、その懸隔を乗り越えていかにして讀者に言外の意を傳えるか（讀者はいかなるプロセスをとつて言外の意に到達するか）、そもそも言外の意はいかにして生じるものなのか、など、詩經解釋學における言外の意に關する諸々の問題を考えるために、本詩は絶好の材料を提供する。さらにそれらは、詩經の詩篇はいかなるものであるか、あるいは詩經を解釋するということはいったいかなる行為であるかという根本的な問題に對する、それぞれの學者の考え方に根差しているという点でも重要である。^⑦ 複雑に絡まり合った歴代の學說の關係を解きほぐしながら、言外の意についての思惟がいかに發展し分岐してその歴史を紡いでいたかを考えてみたい。

2 鄭箋と『毛詩正義』が後世に残した論點

衛風「碩人」を巡っては、歴代様々な解釋が行われ、互いに議論が繰り広げられてきた。その議論の的となる問題は、すでに漢唐詩經學の解釋の中に萌芽的に現れている。本詩小序に次のように言う。

「碩人」は、衛の莊姜を憫あわれんだ詩である。莊公は寵愛する側室に惑溺し、彼女に驕り高ぶり目上を蔑あはする振る舞いをさせた。莊姜は賢明であったが、莊公から正當に遇されず、ついに子供を儲けることがなかつた。衛の國人は憫みかつ憂えた（碩人、閔莊姜也。莊公惑於嬖妾、使驕上僭。莊姜賢而不答、終以無子。國人閔而憂之）

本詩第三章を取り上げてみよう。

碩人敖敖	碩人 <small>せきじん</small>	敖敖 <small>がうがう</small> たり
說于農郊	農郊 <small>のうかう</small>	に説 <small>やど</small> る
四牡有驕	四牡 <small>しほ</small>	驕 <small>けう</small> たること有 <small>あ</small> り
朱幘鑣鑣	朱幘 <small>しゆふん</small>	鑣鑣 <small>へうへう</small> たり
翟芾以朝	翟芾 <small>てきふつ</small>	して以て朝 <small>てう</small> す

大夫夙退

たいふ 夙く退く

無使君勞

君を勞せ使むること無かれ

ここでは、莊姜が莊公に嫁ぐために生まれ故郷の齊の國から衛にやって來た時の、禮式に適いかつ盛大な様子と、彼女を迎えた衛の臣下の言葉とが詠われている。このうち、後半二句、

大夫

夙く退き

君を勞せしむること無かれ

に注目したい。この二句を巡っては顯著な違いを有する異説が複数提出され活發な議論が繰り廣げられてきた。そこに見られる解釋の違いは、ある意味で「碩人」詩全體に對する歴代の詩經學者たちによる、果てしなくまた入り組んだ議論の最も肝要な部分を集約している観がある。この二句について毛傳は、

大夫が退出しないうちは、君主は路寢において朝政を執り行い、夫人は正寢において大輿の用務を執り行⁽⁸⁾う。大夫が退出し、その後で執務を終了する（大夫未退、君聽朝於路寢、夫人聽内事於正寢。大夫退、然後罷）

と、言い、鄭箋は、

莊姜が〔衛に〕やってきたばかりの時、朝夕に朝見する衛の諸大夫はみな早めに退出し、主君を疲れさせないようにした。それは夫婦になったばかりの主君と夫人とが、仲睦まじく過ごせるように計らうのがよろしいという理由からである（莊姜始來時、衛諸大夫朝夕者皆早退、無使君之勞倦者、以君夫人新爲妃耦、宜親親之故也）

と言う。これについて、唐・孔穎達（五七四～六四八）等撰『毛詩正義』（以下、誤解の恐れのない場合は『正義』と略稱）は次のように説明する。

莊姜がすでに莊公の朝廷に入ると、朝見をする諸大夫はみな彼女のために早めに退出した。主君と夫人が新たに夫婦となったばかりで、仲睦まじくするのがよいから、主君を政事向きのことで疲れさせないようにと計らったのである（既入朝而諸大夫聽朝者皆爲早退。以君與夫人新爲妃耦、宜相親幸、無使君之勞倦）

『正義』はさらに右の引用に續けて、第三章全體について次のように言う。

本章は、莊姜が見目麗しく、すべて正夫人としての正式な禮を用いているというのに、主君はどうしてふさわしい扱いをしないのかと言っているのである（此言莊姜容貌之美、皆用嫡夫人之正禮、君何爲不答之乎）

本章が「君何爲れぞ之に答へざるや」と、容姿にも禮義にも缺けるところのない莊姜を莊公が正當に遇しないこ

とを刺っていると、『正義』は言う。これは、後漢・鄭玄（一二七―二〇〇）の箋が、ここで問題にしている二句の前の、本章第一―五句について、

これはさらに、莊姜が近郊に辿り着いたところですのでに正式な衣服に着替えており、そうしてこのような〔豪華な〕馬車に乗って衛君の朝廷に入ったのであり、これはすべて正夫人としての正式な儀禮を用いたものであったことを言う。それなのに、今や莊公から受けて然るべき扱いをされていない（此又言莊姜自近郊既正衣服、乘是車馬以入君之朝、皆用嫡夫人之正禮。今而不答）

と、言い、また卒章について、

この章では、齊の土地が廣大で豊饒、莊姜を送つてやつて來た男女も見目麗しく、禮儀も完備しているといふのに、主君莊公はどうして夫人をなおざりにするのかと言う（此章言齊地廣饒、士女佼好、禮儀之備、而君何爲不答夫人）

と、言うのに基づいている。⁽⁹⁾

鄭玄と疏家はともに、詩句に表現されてはいないけれども、本詩には莊姜を蔑ろにする主君に對する不滿の思いが秘め隠されていると考える。これは、小序の「莊姜を閔むなり」「國人閔みて之を憂ふ」と本詩の表現内容とを結びつける役割を果たしている。すなわち、孔子の教えを受けた子夏が著したとされる小序が、本詩を賢女でしか

も正室であるのに夫莊公から蔑ろにされた莊姜の身の上を憫んで作られた詩であると言っているのに、その詩句が彼女の豪奢圓滿な様を稱賛することに終始しているという矛盾を解消するため、詩句の裏に「今にして答へられず」「君何爲れぞ之に答へざるや」という作者の感慨が籠められていると推定し、それによって本章の内容（「言外の意」ということになろう）と、小序が言う作詩の意としての言外の意とを結びつける回路を作り上げようとしたのである。小序の「これを閲みて憂ふ」を大きな（結論的な）言外の意とすれば、鄭箋の「今にして答へられず」、「正義」の「君何爲れぞ之に答へざるや」は、大きな言外の意を導き出すための小さな（過渡的な）言外の意と位置づけることができる。これを本詩小序の『正義』の、

本詩全四章はみな莊姜がふさわしい扱いを受けるべきであるのに、主君は手厚くもてなさない。このために、國人は憫んで憂えているのである（經四章皆陳莊姜宜答、而君不親幸、是爲國人閔而憂之）

に當て嵌めて説明すれば、「莊姜宜しく答ふべし」が言内の意、「而れども君親幸せず」が小さな言外の意、「是が爲に國人閔みて之を憂ふ」が大きな言外の意とまとめることができる。

第三章に話を戻すと、鄭玄は本章の詩句の裏に「今にして答へられず」という詩人の感慨が言外の意として存在していると考え、疏家はそれを踏襲して「君何爲れぞ之に答へざるや」と言い換えたわけである。しかしながら、『正義』の再解釋ははたして鄭玄の意圖を充分に汲んだものとなっているだろうか。筆者は疑念を抱かざるを得ない。それは、鄭箋が「今にして答へられず」と言っているのに、それを言い換えた『正義』の「君何爲れぞ之に答へざるや」には、「今にして」という要素が脱落しているからである。

鄭玄は、詩に詠われている出来事が起こったのは過去のことであり、詩人がそれに感慨を催し詩に詠っている時点としての「今」（あるいは詩の語り手が語っている時点としての「今」とは違う、と考えている。これは、詩に詠われているのは「今」のことではないが、詩人が本當に問題にしているのは、詩句に詠われていない「今」の有り様である、という認識である。鄭玄が見出した、詩に詠われている内容と詩人の眞意との間に存在する懸隔とは、詩が描き出す事柄が屬する時点と、詩人が感慨を催している時点との間に横たわる懸隔である。つまり、鄭箋に於ける本詩の言外の意とは時間的性情を持つものである。

ところが、『正義』は鄭箋の敷衍をしながら、この「今にして」を受け継いでいない。したがって、疏家は詩句の表現内容と詩人の眞意との間に懸隔がある、すなわち言外の意があると考える点では鄭箋に従っているものの、その懸隔が鄭箋の言うような時間的性情を有するものと考えているかは疑わしい。先に引用した本詩小序に對する『正義』にも、「經四章皆な莊姜宜しく答へらるべきことを陳ぶ。而れども君親幸せず。是が爲に國人閔みて之を憂ふ」と言い、夫莊公から愛情と尊敬を注がれてしかるべき莊姜がそれを受けられていないことを國人が憫み憂うとのみ言い、そのような冷遇を莊姜がいつたいいつの時点から受けるようになったのかについては問題にしている。これから見ても、本詩の表現と意圖との間に時間的懸隔が存在するという問題意識を、疏家が鄭玄と共有しなかつた可能性は高い。莊姜が衛に嫁いでやって來た當初から、莊公は彼女を疏外していた、と疏家は考えていたとすることも可能である。少なくとも、後世の學者が『正義』の解釋をそのように理解する餘地は充分にある。

このような疑念を生じさせる原因は、實は鄭箋側にもある。鄭箋は第三章中の第五句目までを注釋して「今にして答へられず」と言う。これに據れば詩人は第五句までに、莊姜が衛に嫁いで來た時の盛儀を、失われた過去として懐かしく追想しながら詠い、その言外の意として莊姜の置かれた現狀に憐憫の情を起しているということにな

る。それでは、残された第六・七句「大夫 夙く退く、君を勞せしむること無かれ」の二句はいつたいどのような位置付けをされているのであろうか。鄭箋は「莊姜始めて來たりし時、衛の諸大夫の朝夕する者は皆な早く退き、君を勞倦せ使むる者無し。君夫人の新たに妃耦と爲り、宜しく親親すべきを以ての故なり」と言い、莊公莊姜夫妻が新婚の時には、諸大夫が二人が慈しみ合う時をゆつくり持てるように配慮して、朝見もそこに退出したと言う。ここからは、諸大夫が莊姜を歓迎していたと鄭玄が考えていたことはわかる。しかし、そのような配慮を受けた莊公はどうであったのだろうか。それについての鄭玄の考えが判然としないのである。かりに「今にして然らず」がこの部分の後に置かれて、本章全體に掛かっていたとしたら、新婚當時は莊公も莊姜へ應分の愛情を注いだたと理解してかまわないことになる。しかしながら實際の位置は、本章七句の前五句と後二句との敘述内容に質的差異があると鄭玄が考えていたと受け取れるものになっている、少なくとも讀者がそのように読み取る餘地を残すものになっている。ただ、鄭玄がこのように注釋した眞意は、その簡単な記述からは窺うことができない。

これに對して、『正義』は第三章全體の通釋をする中で「君何爲れぞ之に答へざるか」と言つていて、第三章の敘述全體が、莊姜が正當な待遇を受けないことを憫む思いを秘めているとする。『正義』も本章前五句について「其の初めて來たりて嫁す」と言い、後二句については「既に朝に入りて」と言い、本章で嫁ぐ道中と嫁いだ後という時間の流れが存在することには言及するものの、その間隔はごく短いもので、そこに莊姜の境遇の變化＝莊公の莊姜に對する心境の變化が起こつたと考えた形跡は見られない。

このように考えると『正義』は、本章の表現と詩人の意圖との間の懸隔が時間的性格を持つという、鄭箋の認識を受け繼いでいるとは認められない。ただその場合、本章の詩句に詠われた新婚時の莊姜の圓滿無缺な情景の裏に作者の思いがどのように込められていると、疏家は考えているのか、それが判然としない。「今にして答へられ

ず」と言った鄭箋は、新婚の莊姜の幸福と、見捨てられた莊姜の絶望とを読み取っていた。それに對して『正義』は、美しい莊姜が正夫人としての禮を行って輿入れし、衛の諸大夫たちも彼女を歓迎しているのに、莊公一人が彼女に冷淡な態度を示していると解釋しているのだろうか。しかし莊姜はなぜそのような扱いを受けなければならぬのか、それについては疏家は説明しない。莊姜という女性とその境遇を、彼女や人々の心理に分け入って理解しようという意欲が大きくなく、莊姜Ⅱ夫に粗末に扱われた不幸な女性という紋切り型の理解で善しとしていたということになるかもしれない。

このように、鄭箋と『正義』の解釋には見過ごすことのできない相違がある。「今にして」の有無、「答へられず」の語の置かれた位置は、莊姜が結婚當初から不幸だったのか、それとも最初は幸福な日々を送っていたのが後に莊公の心變わりによって不幸になったのかについて、解釋の違いに關わる可能性がある。ひいては莊公の人間像についての理解にも差異があったことを表している可能性がある。しかし、鄭箋、『正義』ともこれらの疑問に明確に答えておらず、その眞意を捉え難い。

これは見方を變えれば、本章に對する漢唐詩經學の注釋は、表現内容と言外の意との間の時間的位相、語り手がどのような位置に立っているか、莊姜の人生行路、莊公の人となりなどについて大きな検討の餘地があることを指し示しつつ、問題の解決を後世の學者に残したとも捉えることができるだろう。小序の説を護持しつつ解釋をひたすら精緻化させ膨大化させてきたと見られる漢唐詩經學の中に、實際には異質な、時には相對立する思考が混じり合っていて、それが後の時代の解釋の呼び水になっていたのではないかと思われるのである。

それでは、宋代詩經學・元明詩經學・清朝詩經學は、自分たちに投げかけられたこのような問題群をどのように受け止め、どのように答えたのであろうか。次節以降でこれを検討していきたい。

3 莊姜はいつから不幸になったか？

『正義』に見られた、鄭箋の「今にして答へられず」に對する問却は、宋代になっても續いていたと考えられる。北宋・蘇轍（一〇三九〜一一二二）『詩集傳』（以下、『蘇傳』と略稱）は、本詩卒章の注釋の中で、本詩全體の主旨を、

この詩で言っているのは、このような「素晴らしい」人がいるというのに衛君はふさわしい扱いをしない、とすれば衛君は責められるべきであり、夫人は憫まれるべきである、ということである（是詩言有如此人者而君不答、則君可責而夫人可閔也）

と概括的に説明するが、本詩の時間性に對する問題意識は見る事ができない。南宋・呂祖謙（一一一三〜一一八二）『呂氏家塾讀詩記』（以下、『呂記』と略稱）第三章の注釋は前人の諸注釋からの引用によって構成されるが、問題となる鄭箋は引用されず、また呂祖謙自身の解釋も示されていない。

このような狀況を變えたのは南宋・朱熹（一一三〇〜一二〇〇）であったと考えられる。本詩第三章『集傳』に、次のように言う。

これは、莊姜が齊から（衛へ）嫁いでやってきた時……衛の國人たちが彼女を莊公の妻として迎えることが

できたのを喜び、そこで諸大夫で主君に朝見する者たちは早々に退出して、主君が政事に疲れて、夫人と仲睦まじくできないようなことがないようにするがよいと言った。このように詠って、今はそうでないことを歎いているのである（此言莊姜自齊來嫁……國人樂得以爲莊公之配、故謂諸大夫朝於君者宜早退、無使君勞於政事、不得與夫人相親、而歎今之不然也）

『集傳』に「今の然らざるを歎く」という言葉がある。これは、詩の語り手の立つ時点を「今」、本章に詠われた内容を過去に属するものと見て、そのようなるわしい状態は過去のものとなり、今は失われてもはや存在しないと歎いていると言っているのである。本章の内容は詩人が過去を回想して敘述したもの、すなわち「追述」であると考えている。描き出された幸福な過去と描かれない不幸な現在という二種類の相異なる色彩に染め上げられた時間が對比されることで、そこに落差の感覚が生じるのである。

朱熹のこのような解釋は、鄭箋の「今にして答へられず」を受け継いだものと言うことができる。加えて、彼は鄭箋が第三章第五句までの、莊姜の輿入れの様子を詠った詩句の言外の意としていた「今にして答へられず」を、第三章全體に擴張してその言外の意としている。これによって、鄭箋が解決することなく残した、末二句「大夫夙く退き、君をして勞せ使むること無かれ」をどう捉えるかという問題にも解答を與えたことになる。すなわち、彼は鄭箋に萌芽的に見られた解釋の視點——時間の推移に伴う人間の幸不幸の變化——を本格的に取り上げて、本詩の解釋を行ったのである。⁽¹⁾

朱熹が用いた論法は、彼の詩經解釋學の中でどのように位置づけられるであろうか。美しく幸福な過去の有様を詠うことで、それが喪失されてしまった事實を際立たせ、その落差の感覚から現在の状況をより強く意識し歎き悲

しむ——このような捉え方は、漢唐詩經學の中でしばしば用いられる「陳古刺今」あるいは「思古傷今」と呼ばれる解釋法¹²と同様の性質を持っている。もちろん、典型的な陳古刺今の詩とは、例えば西周末期の厲王・幽王の悪政に苦しんだ詩人が、周の文王治下の幸福な世の有様を追慕するというように、過去と現在が時代的に大きく隔っていることが多い。それに比べると、朱熹が言っているのは莊姜という一人の女性の生涯における過去と現在という微視的な時間の懸隔ではあるが、過去の幸福と現在の不幸との落差の感覺を原理としている點では共通している。

ところで、つとに檀作文氏が論じているように、朱熹は「陳古刺今」「思古傷今」という概念を用いた解釋に對して批判的であつた。檀作文氏に據ればそれは、朱熹が詩篇解釋の理念として「以詩解詩」——詩を解釋するのに詩句に明示的に表れた意味に基づく態度を守り、詩句に表現されていない事柄を詩の意味として解釋に組み込むことを恣意的なものとして斥けることを主張していたことから來ていた。¹³

しかし、朱熹の批判は、彼自身の「碩人」解釋にも當て嵌まつてしまう。「碩人」には不幸な今を表す詩句はないにも関わらず、『集傳』は「今の然らざるを歎く」と言い、詩人は莊姜の今の境遇が詩句に詠われたようなものではないということ強く讀者に訴えているのだと解釋する。これは「以詩解詩」の理念からは大きく逸脱している、朱熹がこの理念に立つて陳古刺今による解釋のしかたを批判したことと矛盾しているのである。なぜ、朱熹は自繩自縛に陥ってしまうことになる解釋を行わなければならなかったのだろうか。

その理由を考える資料として、彼の「詩序辨說」を見てみよう。本詩小序について次のように言う。

本詩小序は『春秋左傳』に參照するに、本義を得たものである（此序據春秋傳得之）

朱熹は、本詩小序がこの『春秋左傳』の記載と合致しているということを根據にして、本詩小序が正しいと評價している。『春秋左傳』「隱公三年」に次のように言う。

衛の莊公は齊の太子得臣の妹、名は莊姜、を娶った。莊姜は美しかったが子がなかったので、衛人は彼女のために「碩人」の詩を賦した（衛莊公娶于齊東宮得臣之妹、曰莊姜。美而無子、衛人所爲賦碩人也¹³）

『春秋左傳』は、莊姜が子供を得られなかったために、國人が「碩人」の詩を作ったと言う。この記述に小序の「莊姜賢なれども答へられず。終に以て子無し、國人闕みて之を憂ふ」が對應しているので、小序の説は本詩が作られた歴史的實情を正しく反映していると考えた。そして、この二つの文獻に莊姜が不遇になった後で「碩人」詩は作られたとあるので、詩篇から彼女に對する作者の憐憫を読み取る必要が生じた。その結果、朱熹は陳古刺今的發想を用いて解釋を行った。本詩に莊姜が嫁いできた當初の豪華華麗な様子が描かれているのは、詩人が昔を追想して今の彼女の不幸を憫んでいるのであり、『春秋左傳』の「衛人 爲に碩人を賦する所なり」、本詩小序の「莊姜を闕むなり」は、詩句上に表現されておらず、詩句の背後に隱されている詩人の思いを説明したものと位置づけた、このように考えられる。

實はこの説明は、朱熹が「以詩解詩」という理念をもつて、漢唐詩經學で頻用されたもう一つの解釋法である「以史付詩」——詩經の詩篇は歴史的事實に基づいて詠われたと考え、史書の記録を援用して詩篇の解釋を行う態度——に反對したとされることにも矛盾する。けれども、筆者が以前考察したところに據れば、朱熹は確かに「以史付詩」を濫用して詩篇解釋を行うことには反對していたが、この解釋理念の基盤をなす、詩經の詩篇に詠われた

事柄は（歴史的な大事件かどうかは別として）實際に起こったことであるという考え方は、漢唐詩經學と同様に保持していた。¹⁵さらに、小序が莊姜の作とする邶風「綠衣」「燕燕」「日月」「終風」について朱熹は、確證は得られなけれども「今姑く之に従ふ」という立場を表明している。¹⁶朱熹は一部の詩篇が歴史上の事件に際して作られたということを完全に否定してはいなかった。本詩においては、朱熹はむしろ積極的に「左傳」の記述を根據にして、莊姜を詠った詩と主張したのである。

「今にして答へられず」という解釋は鄭箋が早くに提示していたが、おそらくは『正義』がその意を汲んで敷衍をしなかったためであろう、有力な解釋として一般化してはいなかった。¹⁷それを朱熹が改めて取り上げて自身の解釋に採用し、『集傳』が元以降絶對的な權威を得たことにより、局面が一變した。本詩に對する陳古刺今の解釋はその後、廣汎かつ永續的な影響力を持つことになった。その影響は、朱子學を遵奉した學者に對してのみに止まらなかった。一例として、清・陳奐（一七八六—一八六三）『詩毛氏傳疏』（以下、『奐疏』と略稱）の本詩第三章の注釋を擧げよう。彼はまず次のように言う。

詩中の（翟蕝^{てきふつ}して以て朝す）の「朝」の字、（君をして勞せ使むること無かれ）の「君」の字は、いずれも夫人について言ったものである。¹⁸『列女傳』「賢明篇」に詩經を引用して「大夫夙く退き、君をして勞せ使むること無かれ」とあるが、この君というのは女君、すなわち君主の正夫人のことである」と言う。これもまた魯詩の説によって毛傳の正しさを證明することができる例である（經中朝字、君字皆就夫人說。列女傳賢明篇引詩曰、大夫夙退、無使君勞。其君者謂女君也。此又可援魯以證毛矣）

傳統的な解釋では「大夫はぶ夙はやく退ひき、君をして勞はせ使つかむること無なかれ」の「君」が莊公を指していることと、莊公の朝廷に朝見した大夫に向かつて「我が君莊公をお疲れにならせないように」と言ったと解釋する。これに對して、陳奐は「君」が「女君」の意味で、莊姜を指していることと、大輿に伺候した大夫たちに向かつて「正夫人をお疲れにならせないように」と言ったと解釋するのである。このように解釋することによって、詩人の關心が莊姜に集中していることととることができる。それによって、前節で指摘した、漢唐詩經學の解釋で解決されなかった問題——「君」といって詩人はなぜ大夫に向かつて「莊公を政務で疲れさせないように」と呼びかけているのか、これが「莊姜を関む」という作詩の意圖とどう關わるのかという問題——と眞正面から向き合わずに濟ませることができない。ここで、陳奐が自説を論證するために、漢・劉向撰『列女傳』の記述を根據にし、かつ劉向の詩經說が魯詩の系統に屬するものであることから、毛傳を正しく解釋するのに三家詩の説が有効であると説くのは、彼の考證學者としての面目躍如たるものがある。

しかし、陳奐はそれに續けて次のように言う。

詩の上下の詩句の意味は、みな夫人が嫁いできたばかりの盛大な様について詠っている。ただ、この「翟てい芘ひ」として以て朝す」以下の三句は、常の朝見の儀禮について言ったものである。おそらく、莊公が莊姜にふさわしい扱いをしなくなつたのは、彼が州吁の母に惑溺し寵愛するようになって以後のことであり、莊姜と結婚したばかりの頃はふさわしい扱いをしなかつたわけではないのである。故に詩人はこの章においてこのことを明らかにしたのである（詩上下文義皆就夫人初嫁盛時說、而唯此翟芘以朝三句、就常朝之禮言之。蓋莊公之不答莊姜在惑嬖州吁之母之後、其初昏原未見其不答也。故詩人殆於此著明之）

また、本詩小序『奥疏』でも次のように言う。

本詩の内容はみな莊姜が嫁いできた當初の盛大な様を追想して詠っている。小序は、莊姜が最後にはふさわしい扱いをされなくなったことについて説明することによって、彼女が國人に憫まれたことを示したのである（詩中皆追念莊姜初嫁盛時。序則就其不答於終而言之、以見閔爾）

ここからわかるように、陳奐は本詩が陳古刺今的な敘述法を取っていると説明する。

ただし第三章『奥疏』には、「今にして答へられず」という鄭箋は引用されず、鄭玄の説を参考にしたとは書かれていない。と言うことは陳奐は、鄭玄・朱熹に先立って、毛公がすでに詩の表現内容と言外の意との間に懸隔があり、かつそれは時間的性格に關するものだという認識を持っていたという考え方をしていることになる。しかし、毛傳には本章のみならず詩全體についても陳古刺今であることを説明する語はない。そうである以上、陳奐はその陳古刺今説的解釋を、鄭箋によって提起され朱熹に採用され、その後元明の詩經學を経て一般化したという解釋史の流れの中で受容し、考證學的考察をもって煉り上げた上で、それを毛公のオリジナルな解釋として提示したと考えるべきであろう。

言うまでもなく、陳奐は毛傳獨尊の立場を掲げて詩經研究に取り組んだ學者である。しかしこのように見ると、彼の尊崇した毛傳とは決して文字に定着され後世に傳わった限りに止まるものではなかったことがわかる。言うならば、彼は毛傳の「言外の意」を読み取っているのである。言い換えれば、彼は彼の目の前に現に残されたテキストトとしての毛傳を、彼自身が読み取ったその言外の意で膨らませた「毛傳」を尊崇したのである。そして彼の行っ

た毛傳の言外の意の讀み取りは、毛公以後約二千年に渡り學者たちによつて繰り廣げられた批判の應酬、經說の繼承、修正、發展という詩經解釋の歴史を咀嚼した上でなされた。そのようにして陳奐自身がその内實を再構成した毛傳とは、ある意味で彼が最良と考える解釋を盛り込むための媒體であつたとも言えるかもしれない。このことは、陳奐のみならず清朝考證學の詩經解釋學において標榜される「漢學」は、それを歴史的、實體的なものとしてのみ見ては重要な部分を取りこぼす恐れがあること、その實相は各學者の個別の經說を検證することによつて考察されるべきことを示すものである。朱熹が提示した解釋は、清朝考證學の詩經學の深部まで浸透する息の長さを保つたのである。

* * *

他方で、朱熹の解釋は後世の學者から批判を受けてもいる。例として、明・孫鑛（一五四三―一六一三）の説を檢討しよう。彼の『批評詩經』に次のように言う。

本詩は、莊姜が衛にやつてきたばかりの時、衛の國人が彼女を贊美して作つたものである。もし、時を隔てて後に「當時の様子を追憶して」敘述したものとすれば、本章の詠っているのは外的で、後の卒章はとりわけ無内容なことを詠っていてとりとめがないことになる（此當是莊姜初至衛時、國人美之而作者。若是後面述則此章意覺不中節而後章尤覺支慢無收束）

孫鑛は、本詩が莊姜を讚歎あるいは祝福して作られたと言ひ、刺詩ではなく、また詩人が過去を追想して作つた

詩ではないと断定する。これは朱熹の説に対する明確な批判である。

しかし一方で、孫鑛は本詩の題下に「閔莊姜也」と注している。このことは見逃すことができない。なぜならばこれは、本詩を「閔む詩」と捉える点では、孫鑛も傳箋正義および朱熹と同じ立場に立っていることを表すものだからである。それでは孫鑛が解釋した「碩人」という詩世界の中で、「莊姜を閔む」という感情はいったどこにどのようにして存在しているのであるうか。彼は、詩人すなわち衛の國人が莊姜を「美め」て本詩を作ったと言っている。作者の心に彼女を「閔む」感情があつたとは考えられない。つまり、言内であれ言外であれ、作詩の意の内部には憫みの情は存在していないということになる。

とすれば、莊姜を憫む思ひは、作詩の意の外部に求めざるを得ない。すなわちそれは、本詩を讀んだ者の心の中に生ずるといふことになるであらう（ここで言う「讀者」は、廣い意味に用いる。太師・孔子・注釋者・あるいは讀者、いずれにせよ作者ならざる者が本詩を讀んで——あるいは聽いて——抱く感慨、それが「閔む」思ひなのである。そしてその思ひは、詩經を讀んで人間が與えられる心の淨化、教化に合致するものである）。事の顛末を知る者が、本詩で圓滿無缺な莊姜の姿が詠われ、それにふさわしい幸福が衛の國人たちによつて祝福されているのを讀み、その幸福が實際には成就することがなく、彼女は不幸な境遇に陥つたことに思ひを馳せ、二種の時の落差に感じ入り、莊姜を憫む氣持ちが心に生じるといふことになるであらう。

この時、讀者が抱く感慨は、すなわち『集傳』が言う「今の然らざるを歎く」といふ思ひに重なっている。異なるのは、朱熹の言う「今」が、莊姜と同じ時代に生きる衛の國人が莊姜の不遇を現に見ながら本詩を作っている「今」であり、「閔む」とは「作詩の意」としての感慨であるのに對して、孫鑛の解釋においては、本詩の讀者の心に結ばれる莊姜の盛美な風姿と、讀者が歴史的知識として知っている莊姜の不幸な後半生との落差から運命の殘酷

さを突きつけられて抱くのが「関む」という感情であり、つまりそれは「讀詩の意」としての感慨であるということである。『集傳』では詩人の感慨だった「今の然らざるを歎く」という思いが、孫鑣においては讀者の思いにスライドしている。本詩が「関む」詩たり得るのは、作者が詩に定着した世界と、その後、事態が推移した結果の世界との間の落差が讀者に感慨を催させ、憫みの情を湧き起こさせるからなのである。

孫鑣の解釋をこのように分析した結果、興味深い事實に氣付く。それは、『批評詩經』が言っていること——詩篇の讀者の心に、作者の意圖していたのとは逆方向の感情が喚起される、そしてその逆方向の感情こそが詩經の教化の意圖に叶う——このメカニズムは、朱熹が『集傳』の中で唱えた淫詩説と同構造であるということである。そしてまた思い起こされるのは、朱熹は本詩第三章を解釋するに際して、傳統的な陳古刺今説と同構造の解釋方法を用いていたが、この陳古刺今説とは、「以詩解詩」——詩句が表現する事柄によって詩篇の意味を理解する——詩句に表現されない意味を讀み取るうとする態度を戒める——の立場から朱熹が批判した解釋方法であったということである。

そのように見ると、朱熹にとつて孫鑣の批判は痛烈な皮肉となつてゐる。朱熹は本詩第三章を解釋するために、彼が本來反對していたはずの陳古刺今と同様の手法を用いることが必要だった。その朱熹の解釋を批判した孫鑣が用いた解釋手法は、朱熹が「以詩解詩」の理念によつて解釋を行うために用いた「淫詩説」と同じメカニズムを持つものであつた。これは、いわゆる鄭玄の批判を受けた何休が「康成 吾が室に入り吾が矛を操りて以て我を伐つか」と歎じたのと相似た状況と言うことができる。

本詩の陳古刺今的解釋に對する孫鑣の批判には淵源するところがある。南宋・楊簡(一一四一—一二二六)『慈湖詩傳』は、小序を批判して次のように言う。

小序にはもとより誤謬が多い。詳しく本詩を検討するに、ただ齊姜が衛に嫁いだ當初、その聲望の高さ、儀禮の盛大さが描き出されているばかりである。國人はそれを喜んだがために、其の事を敘述し詠唱したのである。「大夫夙く退き、君をして勞せ使むること無かれ」と詠うのに至つては、衛君が新たに婚儀を行ったばかりなので、彼に夫人と相親しんでほしいと願っている氣持ちを表現したものである。後になって回想して作つたということはとりわけあり得ない。詩句の雰圍氣には、そこに憂悶の思いなど表れていない（毛詩序固多謬誤。詳觀是詩、惟見齊姜始歸於衛、其聲燄、儀物之盛。國人說之、故敘詠其事。至曰、大夫夙退、無使君勞、則尤其以衛君新有嘉禮、欲其與夫人相親之情。殊非其後追書。其辭氣略不見其有憂悶之意）

楊簡は、「辭氣」、詩句の發する雰圍氣から、本詩には追想の要素はないと言う。これは孫鑛が「若し是れ後面に述ぶとすれば則ち此の章の意節に中らざるを覺えて、後章尤も支慢にして收束すること無きを覺ゆ」と言うのと同様、詩句が表現する雰圍氣、氣分といった側面から舊説の妥當性を判斷したものである。この點からも、孫鑛の解釋が楊簡のそれを繼承していることがわかる。

ただし、兩者の説には大きな違いがある。楊簡の解釋には孫鑛とは異なり莊姜を憫んだ詩という言葉がなく、徹頭徹尾喜びの詩だとする點である。楊簡と彼の『慈湖詩傳』については、張玉強氏に專著がある⁽²⁾。それに據れば、楊簡は南宋・陸九淵（一一三〇～一一九三）の弟子であり、彼は『論語』「爲政篇」に見える「詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思ひ邪無し」と（詩三百、一言以蔽之、曰思無邪）を詩經解釋の根本的認識とし、この立場から序傳箋の美刺説による解釋を牽強附會として批判した。彼は小序を解釋の據としなかつたのである。彼はまた「情」の純粹性を重んじ、たとえ反社會的行動と見なされるものであつても、そこで詠われた感情が純粹であれば

それは「道心」に通じるものだと考えた。⁽²²⁾このような解釋理念を持っていた楊簡にとつては、本詩が莊姜の輿入れを單純に喜び迎える國人の感情を詠っただけのものに過ぎないとしても、その喜悅の思いが純粹であるというただそれだけで、詩經の一篇として充分な存在意義を有すると認められるのである。

これに對して、孫鑛は風教という詩經の機能を重視せずにはいなかったが故に、詩中に見出だすことができな道徳的意義を、讀者の心理的反應に求めようとし、そのメカニズムを想定した。これは、彼が朱熹『集傳』が至高の權威を持っていた明代に詩經研究に携わったということが恐らく理由となっていただろう。そのように考えると、朱熹の解釋に反對した孫鑛もまた朱熹の詩經學の影響圏から脱しきつてはいなかったことがわかる。

4 誰とともに不幸な莊姜を憫むか？

詩句に表現されていないにも関わらず人に感得されるのが言外の意とした場合、それは作者が意圖して伝えようとしたものだろうか。それとも、作者が意識していないにも関わらず自然に人に感得されてしまうものなのだろうか。かりに、「碩人」における言外の意を作者が言葉としては表さなかったけれども人に傳えたかと思いと捉えた場合、作者が思いを傳えたかった相手とはいかなる人物であったのだろうか。これらの問題について歴代の詩經學者はどのような認識を示していたのであろうか。この問題を考えるための手がかりとして、南宋・嚴粲（生卒年不詳）の解釋を取り上げたい。⁽²³⁾本詩小序『詩緝』に次のように言う。

本詩小序初句に「莊姜を閔」んだ詩と題しているが、それが正しいことは『春秋左氏傳』「隱公四年」の記

事から實證することができる。詩經を解釋するのにもし小序初句を用いなかったとしたら、本詩を莊姜を美め、た詩と解釋してもよいということになってしまわないか（首序題以閔莊姜、有左傳可證、說詩若不用首序、則以此詩爲美莊姜可乎）

作者は莊姜を憫んで本詩を作ったのに、その詩には憫みを表現する詩句がない、したがって讀者が莊姜を憫んだ詩だと確信するためには小序首句、および『春秋左傳』という外部の歴史記事を参照しなければならぬ——このように嚴察は言う。彼の説に據れば、本詩は後世の讀者にとつて、作者の意圖を充分に表現し得ていないものになつてしまつている。これでは、本詩は意味表出の機能という面で充分な能力を發揮しておらず、至らぬ所があるということになつてしまふ。なぜこのような状態になつてゐるのだろうか。首章『詩緝』に次のように言う。

詩人は、莊姜が地位にふさわしい扱いを莊公からされなかつたということを直接は言っていない。しかし、首章ではその親族について具體的に列擧しながら敘述しているのは、詠われているのが莊姜のことだと本詩の讀者に氣付かせようとしたのである。それに氣付いたならば、彼女がふさわしい扱いをされてゐないことはもとより國人はわかつてゐるのだから、いちいちあからさまに言う必要はなかつたのである（風人不直言莊姜不見答之事。但首章歷述其親族、欲讀之者知其爲莊姜、則不見答之事、國人自知之、不待察察言之矣）

莊姜の不幸な境遇は誰もが知つてゐるのだから、詩が詠つてゐるのが莊姜のことだとさえ讀者にわかれば、詩人の憫みの念は自ずから傳わるのであり、その意味では、作者が彼が想定する讀者に意圖を傳えるという機能に缺陷

はない、と嚴察は考える。

このような考え方が成り立つためには、前提となる認識が必要である。それを表すのが右の引用中の「國人自ずから之を知る」である。嚴察は、本詩を読んでその作られた意圖を知ることができるのは、衛の國人だと限定しているのである。このことは、小序『詩緝』によりはつきりと言われている。

しかしながら、當時衛國の人でこのことを知っている者ならば、本詩を一讀しただけで作者の言わんとするところは黙っていてもわかったのである（然當時衛人知其事者、一讀其詩便已默悟矣）

ここで嚴察は、本詩の作詩の意圖を「黙悟」する者を「當時の衛人の其の事を知る者」と規定している。莊姜と同じ時代、同じ國に生き、彼女のひととなり、來歴、境遇をよく知っている衛の國人——そこには當然本詩の作者も含まれる——の間にはもともと莊姜を憫み同情する氣持が潜在的に満ち渡っていた。そういう人々は、莊姜のことを詠った詩でさえあれば、それを讀めば心の中の莊姜への同情が溢れ出す。そのような共通感覺が當時存在していた。本詩はそのような人々の心の中の思いを溢れ出させるための引き金のような役割を果たすために作られた——嚴察はそう言う。思いを共有する者同士の限定された世界の中で、自分たちが思いを共有している仲間であるということを確認するために作られたのが本詩であるということになる。

これを言い換えれば、作者が本來想定していた本詩の讀者はこのような感覺を共有する人のみであり、そうでない者はそもそも讀者として考えられていないことになる。ここには、詩というものは本來時空を共にする限られた者の間でのみ享受されるものであったという認識が見られる。時代を過ぎたらものはやその働きを失う消費期限付の

制作物なのである。詩人の個人的な感情を、見知らぬ他者に披瀝するために作られたものではない。

したがって、嚴祭の考えに據れば、詩は後世の讀者のために作られたのではなく、彼らが享受するということは、そもそも作者の意識の中にはない。後世の讀者は、いわば招かれざる客のようなものである。そのような人間が本詩を讀んでも十全な理解を得られないのは當然であり、それが表現が行き届かないものに見えるのが、情報の缺落を有するテキストだと言おうが、それは作者の關知するところではないのである。したがって、後世の讀者は、本詩を味讀するためにむしろ自分から、詩人と感覺を共有する努力を拂わなければならない。そのため、詩以外から必要な情報を獲得し彼にとつての缺落部分を補充しなければならない。嚴祭に據れば、それを援助するために國史または孔子が付け加えたのが、「莊姜を閔む」という小序第一句である。²⁸讀者はこれを詩篇と併せて讀むことで、詩人が本詩を作った當時、衛の國人の間に存在していた感覺の共有を擬似體驗できる。さらにあるいは『春秋左傳』の記事を參照することによって、小序の信賴性をより強固にできる。

このように考えると、嚴祭の考える本詩の言外の意とは、本來は作者が意圖して設けた修辭的技法ではなく、作者と、彼が本來想定していた讀者とが屬していた閉じられた圏域に存在していた共通感覺であつたということになる。詩の成り立ち、詩が作られた所以に由來しておのずからある言外の意である。それが時代を隔てた讀者、いわば作者にとつて想定外の讀者にとつては、あたかも秘められた謎としての言外の意に見えるわけである。その謎を解くための鍵は、詩の外に探さなければならぬことになる。

このような考え方は、後世に受け繼がれた。それが顯著に現れているのが清の考證學者の戴震（一七二三～一七七七）である。彼は『毛詩補傳（以下、『戴補傳』と略稱）』の中で、本詩を解釋して次のように言う。

私は、「碩人」詩を読んで詩の言葉と作詩の意というものは一概に論じることができないものであることを知った。本詩の言葉は莊姜を賛美しているように見えるが、作詩の意圖は彼女を憫むところにある。『春秋左傳』に「……（すでに引用した記事につき省略——筆者補記）」と言っているのも、また本詩が彼女を憫んで作られたと言っているのである。作詩者の意圖というのは、ただ字句だけから求めようとしたならば、必ずしも得られるとは限らないものであり、さらに「其の世を論」じ「其の人を知」らなければならぬ⁽²⁶⁾のである。およそ「美」と言い「刺」と言うものはおおむねそうしたものである（余讀碩人之詩而知詩之爲辭與作詩之意誠不可一概論也。是詩辭若美莊姜而意則閔之。春秋傳曰……亦言乎閔之之意也。作詩者之意、有但求之乎辭而未必能得者、又當論其世知其人焉。凡爲美爲刺、類如是）

戴震の認識は、嚴粲の思考を受け継ぎつつも相違が認められる。彼は、「毛詩補傳序」に次のように言う。

作詩の意は、前代の人々がすでにその傳承を失ってしまったものは、「其の世を論」じ「其の人を知」るのではなくれば、もとより獨りよがりな考えで推定することは困難である。私はとりあえず孔子がかの三百篇に下した斷案⁽²⁷⁾によって、各詩篇について推論し、それを各篇の篇題の後に付記する（作詩之意、前人既失其傳者、非論其世、知其人、固難以臆見定也。姑以夫子之斷夫三百者、各推而論之、用附於篇題後⁽²⁸⁾）

戴震は小序を「毛氏篇義」と稱した。これは小序を毛公の詩經解釋體系内の存在と位置づけることによって、詩人や孔子の意圖を直接表すものとしてして別格の扱いをすることを排したことの表れと考えられる⁽²⁹⁾。彼は嚴粲とは

違い、小序の記述を解釋の根幹としなかった。彼は、『論語』「爲政」に見られる孔子の詩經の詩篇に對する「詩三百、一言以て之を蔽へば、曰く、思ひ邪無し」という評語を根據に、詩篇は「邪の無い思い」によって作られているという認識を根本に据え、かつ作詩の時代状況と作者の人間像を知るために歴史的考證を行うことが必要であるという解釋理念を主張した。このうち、「思ひ邪無し」を詩經解釋の根本理念に据えることは、第3節で取り上げた南宋・楊簡と共通する³⁰。

ただし、戴震の詩經學においては、それに加え各種の史料、本詩で言えば『春秋左傳』の記述が、詩篇の意味を理解するための情報源としての價值が高まった。そこには、詩人の意圖は字句のみからは把握できず、詩の作られた時代状況、詩人の人となりの考察を踏まえた上でなされなければならないという解釋理念がある。

詩はその詩句自體だけでは充分な情報を提供しておらず、それを得るために詩以外の資料に據らなければならぬという考え方は、嚴粲と共通する。ただし嚴粲は、依據すべき根幹の資料とした小序首句については、詩を收集保管した國史の他、それらの詩群を編集して儒教の經典たる詩經を作り上げた孔子の意圖をも表すものと考えた³¹。そこでは、小序は詩經本體との距離が極めて接近しており、儒教の經典としての詩經を構成する不可缺の一部分となっていて、『春秋左傳』などの史料とは次元が異なる存在とされている。それに對して、戴震は小序の超越的權威を認めず、「思ひ邪無し」という、詩經を貫徹するものと彼が考える理念に基づいて作詩の意を彼自身が推論した上で、他の文獻資料によってそれを考證していくというプロセスを考える。「思ひ邪無し」という孔子の斷案を頼りに作詩の意を考えようとする點では楊簡と共通するが、楊簡とは違い自分の推論を歴史資料に據って檢證しようという態度を持っている。また、詩句だけからは作詩の意圖は捉えきれず、他の文獻の記述を合わせて參考にしなければならぬと考える點では嚴粲と共通するが、嚴粲とは異なり、小序と他の文獻との間に價值的差異を認め

ない。ここには、清朝考證學の方法論の確立者としての彼の態度が明確に現れている。

5 莊姜の不幸に自分たちも責めを負わねばならぬか？

嚴粲の「碩人」『詩緝』には、言外の意に對して、前節で見たものと性質の異なる認識も見られる。本詩小序「詩緝」に次のように言う。

ただ本詩第三章の「大夫夙^{はや}く退き、君をして勞せ使むること無かれ」の二句には、その「莊姜答へられず」の意がわずかに表現されているが、言葉はやはり思いが深く婉曲である。國風びとの言葉というものは大抵このようである（唯大夫夙退無使君勞二語微見其意、而辭亦深婉、風人之詞大抵然也）

また、第三章「詩緝」に次のように言う。

莊姜は、禮に従って衛に嫁いできたのだから、ふさわしい待遇を與えられないということがあるはずがない。ひよっとして、我が君は政事向きの仕事に疲れて、夫人と相親しむ暇がないのではなからうか。もしそうならば、朝見する諸大夫はなるべく早く早く退出し、我が君を政務に疲れさせないようにするがよい○君が莊姜を蔑ろにしたのはお氣に入りの姬妾に惑わされたためであるが、この詩では政事向きの仕事に疲れ果てたことが原因であるとしている。邶風「凱風」では、母が再婚して他家に嫁ぎたいと思っているのは淫らな風氣が流行して

いた〔のに影響された〕が故であるのに、「凱風」は〔自分ら子供たちを育て上げるために拂わなければならなかった〕勞苦の致すところだと言う⁽³²⁾。國風びとの言葉は微妙で婉曲なものである（莊姜以禮來嫁、不應不見答。豈吾君疲於政事而未暇與夫人相親耶。若是則諸大夫聽朝者宜且早退、無使吾君勞於聽斷可也○君之不答莊姜以惑於嬖姜之故、而此詩以爲勞於政事所致。母之不安其室、以淫風流行之故、而凱風以爲勞苦而然。風人之辭微妙矣）

第2節で見たように、本詩第三章の「大夫夙^{はや}く退き、君をして勞せ使むること無かれ」の二句は、その意味およびそこに込められた詩人の思いと意圖について、漢唐詩經學では明確な説明をすることなく、曖昧性を残したままになっていた。朱熹はこの二句を第三章で描かれた、盛大かつ儀禮を守って齊から莊公のもとへ輿入れして來た莊姜を迎えた衛の國人みなが歓迎している様子の一環として捉えた。國人が新婚の主君夫婦に配慮して朝見もそこそこに退出しようと呼び掛けあっている様子を詠い、その裏に陳古刺今の言外の意——莊姜の不遇な現狀に對する慨歎——が込められていると考えた。このように解釋することによって、漢唐詩經學で積み残された問題に一つの解答を出した。

嚴粲はこの二句の問題に對して、朱熹とは異なる解答を提示している。彼は次のように解釋する——國人たちが、自分たち臣下が毎日主君のもとに長居することによって、主君が夫人莊姜と水入らずで語り合う時間を奪っているのではないか、そのために、莊姜は夫から遠ざけられた形になってしまっているのではないか、すなわち、莊姜が不遇を託している原因は實は自分たち臣下の配慮の至らなさにあるのではないか——。嚴粲は二句の裏にはこのような詩人の思いが隠されていると考えて、眞正面から主君莊公に罪を着せることを避けつつ、莊姜の不遇を明ら

かにしようとしての表現であるとする。不幸な境遇にある莊姜を憫み、また彼女をそのような境遇に追い込んだ莊公に不満を抱いた國人が、自分の思いをあからさまにはなく、實情とは異なることを故意に述べる中に包み隠しつつもそれとなく伝えようとしたものであると考える。つまり、彼はこの二句に「微婉」のレトリックを讀み取るのである。このような表現は、邶風「凱風」でもなされ、國風の詩の作者が好んで用いる修辭手法だと言う。⁽³³⁾

嚴粲の注釋には、本詩を陳古刺今と見なす言葉はないので、鄭玄―朱熹とは異なる解釋をしていることがわかる。嚴粲は、莊姜が新婚時は莊公と仲睦まじく幸福に過ごしていたが、後に莊公の愛情を失ったという境遇の變化を讀み取らない。莊姜は新婚當時から不遇であった―豪華な出で立ちで齊に嫁いで來たけれども、彼女を迎えた莊公は案に相違してつれない態度を示した―と、嚴粲は明言はしていないものものとしていたと考えられる。このように見ると、彼の解釋は、第3節で見た『正義』との類似性が認められ、『正義』の說をもとにしてそれを發展させたと考えることができる。

それでは、嚴粲は『正義』の說に學びながらそれをどのように消化して、自身の解釋を作り上げたのだろうか。『正義』の說をもう一度見てみよう。

莊姜がすでに莊公の朝廷に入ると、朝見をする諸大夫はみな早めに退出した。主君と夫人が新たに夫婦となつたばかりで、仲睦まじくすべきであるから、主君を政事向きのことで疲れさせないようにと計らつたのである。ここでは、莊姜が見目麗しく、すべて正夫人としての正式な禮を用いているというのに、主君はどうしてふさわしい扱いをしないのかと言っているのである。

『正義』は、莊姜を迎えた衛の國人たちが新婚夫婦が仲睦まじく暮らせる時を持てるよう配慮して、朝見しても早々に退出したということと、莊公が莊姜をなぜ疏外するのかといぶかっていることの二つの事柄に觸れている。しかし、この二つは單純に結ばれる事柄ではないのに、それらがどのような論理關係で繋がるのか説明されていない。

これと比較すると嚴粲の解釋では、莊公が莊姜を疏外している状況の中で、その理由を付度し自分たちの行爲にその責を歸し、莊公に政務の負擔をかけることがないよう早々に立ち去ろうではないかと呼びかけるといふように、論理的整合性を持った説明になっている。『正義』が積み残した問題を解決し首尾整った解釋に仕立て直しており、それを實現するために嚴粲が用いたのが「大夫夙く退き、君をして勞せしむる無かれ」の二句に、詩人が莊公への不満を秘め隠し、自分たちが責を引き受けつつ、それとなく眞意を伝えるという、配慮に基づいたレトリックの読み取りであったということになる。

前節の考察に據れば、嚴粲は本詩の言外の意を詩人が意圖したものとは捉えていなかった。自分と身近な限られた範囲内の讀者と思いを共有するために詩を作ったところから、同じ時代同じ環境を共に生きる者同士、わざわざ言わずともわかる事柄は詩句に表現せず済ませたため、時空を越えた後代の讀者たちにはそれが謎として残され、詩句の裏からそれを讀み取らなければならなくなつた、それが言外の意として受け取られるのであると考えていたところが、ここではそれとは異なり、詩人が故意に自分の眞意を隠し、韜晦した表現を採ったことにより、言外の意が生まれたと言っている。これからわかるように、嚴粲にとつて詩經の言外の意は一義的なものではなく、異なる動機や状況から生まれた性質の異なる複数ものが包含されている。と同時に、言外の意を故意の表現と捉える場合にも、具體的で個別的な状況の下で自分の意見を効果的に表現するために選擇された技法と考えている。言外

の意が存在する理由を考える際に作詩の状況を重視するという点では、二種の認識には共通点が認められる。

これと比較すると、詩篇が特定の讀者のために作られたという認識は朱熹には顯著ではない。しかも、彼は淫詩説で明らかかなように、詩篇の讀者は詩篇の表現に對して一定の反應を示すことが想定されている。³⁴人間や状況を具體的に捉えるのではなく、一般化して考える傾向を持つていえると言ふことができる。そのような『集傳』の後に、嚴粲は独自の詩經學を構築することになったのである。そのように考えると、人間を抽象的に捉え皆が同じ感情的反應をするという朱熹の考え方に、嚴粲は飽き足りなかつたのではないだろうか。人間をより具體的個別的で多様な存在として捉えようとしていたのではないだろうか。そのような考え方を持ちながら、詩人が自分の眞意を表現上は秘め隠しつつも、それを讀者が感得する（あるいは讀者に感得させる）という仕組みを考えただけではないだろうか。そのために、詩は本來詩人の思いを阿吽の呼吸で感得する限定された讀者のために作られたと考え、かつ、詩に表現された内容とは裏腹の作者の眞意が存在することを讀者に氣付かせるためのレトリックが使われたと考えたのではないだろうか。これらは現在のところすべて推測に過ぎないが、朱熹以後の詩經學の展開を考えるための一つの視座として、提示しておきたい。

ただし、このような嚴粲の解釋は、朱熹を含む先人の解釋に立脚しながら、それを援用することによってできあがつたという側面を持つことにも注意すべきである。嚴粲は本詩第三章の注釋の中で、詩人の莊公への配慮に基づくレトリックの存在を見出だすその傍證として、邶風「凱風」を擧げている。衛國に蔓延する淫亂の風氣に毒されて不道德な戀愛に溺れる母を改心させようとした子供たちが、母親の行爲を眞正面から責めるのではなく、自分たちが至らなればかりに母親に苦勞をかけ、それ故に母親は安定した生活を求めてどこかの男性と結婚しようとしている、母親を不道德な行爲に追い込んだのは自分たち子供のせいであると故意に自責の念を詠うことによって、母

親を傷つけずにその改心を企圖した——このような「凱風」の解釋は、漢唐詩經學以來行われてきたものであるが、ここでは、嚴粲が本詩第三章を解釋する上で用いた「配慮のレトリック」がすでに用いられている。嚴粲はこの「凱風」と本詩とが同様の修辭技法を持つと言う。ここから彼が「凱風」の傳統的な解釋に見られるレトリックを他の詩篇に應用して獨自の解釋を作り上げている様子が窺われる。彼は、傳統的な詩經解釋の方法を消化しながら、その應用可能性を追求することによって彼自身の詩經學を構築するという着實な方法を採用していたことがわかる。

ところで嚴粲の説は、作者が自分の周圍に向かつて莊姜への同情を喚起するために本詩を作ったというものである。その場合、「大夫夙く退き……」の二句で、莊公への不滿を直接吐露せず、自分たち臣下の責任と言っているのは、いったいどのような意圖に據るといふことになるのであろうか。嚴粲は「風人の辭微婉なり」と、國風の作者は微妙で婉曲な措辭を好むものであると一般論的に説明しているが、本詩について言えば、なぜ「微婉」な修辭表現をする必要があつたのだろうか。本詩が莊姜を憫んで作られたものであるとして、いったい「微婉」な表現は誰に對する配慮のためになされたのであろうか。このような問いかけの内に、莊姜を憫むことのその裏面として、莊公の存在が浮かび上がってくる。「君何爲れぞ答へざるや」という言葉には、莊姜への憫みとともに莊公に對するある種の感情をも含有されているからである。

このように考えると、本詩の解釋においては、なぜ莊姜を憫むのかということから、何を目的として莊姜を憫むのかという問題意識へのシフトが起ころざるを得ない。このような視點から、朱熹と嚴粲がそれぞれ完結した解釋を提示した後の學者が、どのようにして本詩を解釋を多様化させたか、あるいは深化させたかを見ていきたい。

6 狂惑なる莊公をどのように相手にすればよいか？

前節で提起した問題を考えるためには、「碩人」解釈を巡る、これまで見てきたものとは異なる問題を取り上げなければならない。それは、本詩で詠われているのは終始皮相な事柄であり、莊姜の内面の美德に觸れるところがなく、それはなぜだろうかという問題である。

南宋・輔廣（生卒年不詳）『詩童子問』は本詩卒章において次のように言う。

邶風「燕燕」などの詩篇を見ると、莊姜の德行や文才はいずれも人が簡單にはその域に辿り着けないほどのものであるのに、本詩ではそのことに觸れていないのはいったいなぜであろうか。これは、ただ彼女の素晴らしさのうち誰もが容易にわかるものを指し示すことよって、莊公が暗愚で惑亂していたが故に、それさえわからなくなっているということに刺しているのである。莊姜の美點はもとより本詩で詠われた事柄に止まるものではない（觀邶風燕燕等篇、則莊姜之德行文章皆未易及、而此詩不之言何也。此但指其所易見者、以刺莊公之昏惑而不知耳。莊姜之美則固不止此也³⁶）

輔廣は朱熹の弟子で、『詩童子問』は彼が聞き學んだ朱熹の詩説をまとめたものである³⁵ので、右の説にも朱熹の意見が反映されていると考えられる。『集傳』では、邶風「綠衣」「燕燕」「日月」「終風」そして「邶風」の五篇を莊姜の自作詩としていて、莊姜は優れた詩人であり、また極めて高い道德性を持つ女性であると捉えられている。

そのような莊姜の美徳に「碩人」がまったく觸れることなく、ひたすら外面的な素晴らしさのみを稱賛することを、『詩童子問』は問題にしている。そして、文才や道徳性のような内面的美徳は誰もが容易にわかるものではないので、逆に美貌や高貴さや裕福さといった、誰もが一目で理解できるような素晴らしさを詠うことによって、それさえわからず莊姜を蔑ろにする莊公の愚劣さを刺っているのだと答えている。『集傳』も本詩首章の注釋の中で、

本詩首章では筆を極めて莊姜の一族の高貴さを譽め稱えて、彼女が正真正銘の正夫人であり、親しく手厚くもてなすのがふさわしいことを表現し、そうして莊公が暗愚で惑亂していることを深刻に歎いているのである（而其首章極稱其族類之貴。以見其爲正嫡小君、所宜親厚、而重歎莊公之昏惑也）

と、『詩童子問』の記事と同方向の解釋が見られる。

朱熹は、「重く莊公の昏惑を歎ず」と言う。これと小序の「莊姜を閔む」とを比べると、詠う對象が莊姜から莊公へ、詠う思いが憐憫から慨歎へと轉換していることがわかる。『詩童子問』ではさらに、「莊公の昏惑にして知らざるを刺る」と、莊公に對する慨歎から批判へと移行しているのである。

ここで、第2節で見た鄭箋と『正義』が想起される。彼らもすでに本詩の詩句の裏に「君何爲れぞ之に答へざるや」という、作者の莊公に對する不満の氣持ちが込められていると指摘していた。ただし、鄭箋と『正義』においてこの莊公に對する不満は、莊姜に對する稱贊という詩篇の内容と、小序が言う「莊姜を閔む」とを結びつける一種の回路を作り上げるために想定されていた。彼らにとって、本詩の主旨はあくまで莊姜に對する憫みにあるのである。

朱熹―輔廣ではそれと異なり、莊公に對する慨歎・批判こそが作詩の意圖だと捉えられており、莊姜と莊公との比重が逆轉している。朱熹の解釋に據れば、莊姜を贊美する詩句の裏には、莊公への失望が込められている。そして、それを表現面で支えているのが、ひたすら誰にでもわかるような皮相な事柄に對する稱贊を表す詩句を列擧することによって、その裏にそれさえ理解できない莊公の暗愚さに對する作者の批評的視線を暗示させるといふ表現技法である。一見作者の思慮の足りなさを示しているように見える本詩の内容は、實は莊公に對する批判を効果的に展開するために考え抜かれた結果の表現ということになる。『集傳』は「重く歎ず」と言つて、詩人が感情を抑制できずに思わず吐露しているという口振りをしているが、實はその表現内容は冷静な計算に基づいて選擇されていると認識しているのである。

明・徐光啓（一五六二―一六三三）『毛詩六帖講意』に次のように言う。

莊姜のうるわしい徳、優れた文章はとりわけ贊美すべきものであるが、本詩ではそれに言及しないのは、おそらく世俗の理解しやすいものを取り上げて詠つたのである。これら〔表層的な優位點にすぎないもの〕を論じてさえ、捨て去るには惜しいものであるのだから、ましてその他のものであればなおさら惜しむべきである。このように言うのは深く莊公の暗愚惑溺を歎いているのである。こうした詠いぶりは特に深い思いが籠もつていて婉曲な表現であつて味わいがある……いずれも所謂「詩は言外に在り」ということである（莊姜之德懿文章尤爲可美、而此章不之及者、蓋就世俗所易見而言。以爲只論此等已不可棄、況其他乎。所以重歎公之昏惑也。此等最深婉有味……皆所謂詩在言外者也）

傳箋正義が本詩の主旨を莊姜への憐憫としたのを、朱熹が莊公への批判に轉換したのに徐光啓も従っている。また、全篇皮相な事柄を詠っているのは、賢愚に關わらず誰しもが理解できる素晴らしいことを詠うことによつて、そのようなものを持つている莊姜を大切に扱わない莊公の暗愚惑亂を厳しく風刺すると言うのも、朱熹の説に従っている。³⁰⁾

明・沈守正（一五七二—一六二三）『詩經說通』も、本詩について次のように言う。

詩人がつぶさに「莊姜の生國、容貌、お付きの者どもの素晴らしさを」列擧して詠うのは、おそらく莊公がお氣に入りの側女のために正夫人の地位を奪つたことを指彈したいのだが、それを明言するに忍びず、故人情として理解しやすい事柄をつぶさに述べることによつて自分の見解を皆にわからせようとしたのである。すなわちこの議論によつても莊姜に批判される所などありはしない。ましてやその美德はここに詠われたものに止まらないのであるからなおさらである。贊美の詩句を鋪き列ねているが、言外にはいぶかり慨歎する雰圍氣がある。言葉が緩やかであればあるほど莊公の狂氣と惑亂を刺る氣持ちはますます深刻になる（詩人備擧而言之者、蓋欲指莊公以嬖奪嫡之故而不忍明言、故備述人情之易曉者以通之見。即以此論而莊姜已無可議矣。況其美又不止此乎。雖鋪述贊美之詞而語外寔有疑怪咨嗟之味。詞愈緩而刺莊公之狂惑愈深矣）

徐光啓、沈守正ともに、朱熹の説に従いつつ、詩句に隠された莊公への慨歎を言外の意として捉えている。ここでは莊姜に對する憐憫は、莊公に對する慨歎・批判という言外の意を表現するための一種の手段としての言外の意となっている。二重の言外の意を見出だしているのである。

朱熹による本詩の注釋を讀み、このように分析した結果、次のような疑問が湧く。すなわち、作者はいったい何を目的として莊公を刺っているというのだろうかという疑問である。『集傳』にはこの疑問に對する説明はされていない。となると、本詩は詩人がひたすら莊公の暗愚と惑亂を刺つたものになつてしまふのではないだろうか。この疑問は視點を拡大して言えば、朱熹にとつて詩經における「刺」とはいったい何のために存在するものだったのであらうかという問題に繋がる。

朱熹の解釋を讀んで起こるこの疑問は、一つには作者が誰に讀ませるために本詩を作つたかという問題に、朱熹が正面から答えていないことに起因する。これを嚴察と比較してみよう。第4節で見たように、嚴察の解釋では詩人が本詩を作つて聽かせようとする相手が特定され、限られた具體的な範圍に通用させるために作られた詩として捉えられていた。その結果、莊姜に對する憐憫の情を人々と共有するという作詩の目的が明確化されており、また作者も、莊公と莊姜を巡る事態の渦中に身を置く當事者の一人としての切實な感情を有しているという印象が與えられている。

これと比べると、朱熹の解釋における本詩の莊公への慨歎あるいは批判は自己目的化してしまい、詩人は遠く離れた圏外から本詩が描き出す事態を眺め批評する、あたかも歴史評論家のような存在になつてしまつている印象を受ける。

『集傳』の解釋のこのような特徴は、後の學者が『集傳』を敷衍して行く上で問題になつたと思われる。その一端を見てみよう。

元末明初・劉玉汝（生卒年不詳）『詩續緒』に次のように言う。

〔首章から第三章まで〕みな莊公が莊姜を蔑ろにしていることは詩句には表現されていない。「君をして勞せ使むること無かれ」の語を讀むに及んでようやく、今そうではないことを慨歎する思いを言外から感得することができる。その上で、前後の章を見直して見ると、はじめて深く莊公を歎く思いがみな言外に表れていることがわかる（皆不見莊公不見答之意。至無使君勞之語、然後歎今不然之意可見於言後。又以觀前後章之辭、然後重歎莊公之意、皆可見於言外）

讀者が本詩を一讀した場合、詩人の意を把握する手掛かりを見つけないのに難澁するが、第三章の「君をして勞せ使むること無かれ」まで讀み進めるとそこに、今はそうではないという慨歎が言外に込められていることに氣付く。そしていったんそれに氣付いて本詩を改めて讀み直せば、一讀して氣付かなかった言外の意が詩句ごとに隠されていることが明らかになる、と劉玉汝は言う。

また、本詩が莊姜の一族、彼女の容貌、その車馬、お付きの男女の盛大な様といった表層的な事柄への贊美に終始していることについては次のように言う。

作者の意圖は、莊公は暗愚で惑亂して、莊姜が内面的な美德を持つていることなどはわからず、理解できるのはこの程度の事柄だけである、ということである。詩人が本詩を作ったのは、あるいは莊公が本詩を聞いたら、正道に立ち戻って正夫人を親しく手厚くもてなしてはくれないかというところにあつたのかもしれない。思うにわかりやすい事柄を用いて慨歎するというのは、これも「わかりやすい事柄を導入口としておもしろに諫める（納約自牖）」⁽⁴⁾という方法である（意者莊公昏惑、不知有德、其所知者惟若此等而已。詩人之作此

詩、意或莊公聞之、庶幾可回其親厚正嫡之意。蓋因其所明者歎之、亦納約自牖之法也。

劉玉汝の説明は、『詩童子問』に見えた朱熹の説に基づいている。ただし、取り上げるポイントは同じだが、ここに込められた作者の目的・方法意識についての認識は、『詩童子問』と異なっている。『詩童子問』では、なぜ本詩が表層的なことのみを賛美しているかという点、そのような誰でもわかるような事柄さえも莊公は理解できないのだと言って、彼の愚昧さを浮き彫りにするためだと言っていた。詩人が賛美する内容を故意に卑近さの最低レベルまで落として選擇したと捉える點は、劉玉汝も同じである。両者が異なるのは、『詩童子問』ではそこまでレベルを落としてすら莊公には効果がないと、その暗愚さをあげつらうための、言い換えれば莊公を見放すためのレトリック、批判のための批判とされていたのが、劉玉汝は逆に、そこまでレベルを落としてでも莊公の改心を願って積極的に働きかけようとする詩人の意欲の表れとしてのレトリック、主君を教え諭そうとする赤心が言語表現に結晶したものと捉えられているところである。

劉玉汝の注釋中に見られる「納約自牖」（道理を教えるのにわかりやすい事柄から説き始める）の語からわかるように、詩句表現もそれに對應して、莊公の知力に合わせて彼でも理解しやすく受け入れやすい事柄を例に取ったと考えられている。なぜ本詩は表層的なことばかり賛美し、莊姜の内面の美徳に踏み込まないのかと言えば、愚昧な莊公に内面的美徳という高邁な事柄を詠っても理解されることはなく、無意味なばかりか逆効果に陥る恐れもあるからである。朱熹―輔廣の解釋では、作者が詩篇を詠って聞かせようと想定している對象が不明確であったのが、劉玉汝の解釋では莊公として明確化されている。

劉玉汝は、本詩が主君莊公を改心させ莊姜に對する扱いを改めさせるといふ目的で、諫言を圓滑に成功させるた

めのレトリックを用いて作られたと言い、『集傳』と異なり本詩の作られた目的、目的に對する表現の方法的意義を合理的に説明している。作詩の目的が明確化されているため、朱熹の解釋に見られた、莊公への批判が何を狙ったのか不明確で、批判のための批判をしているように映るといふ弱點が克服されている。この意味で劉玉汝の解釋は、本詩の「刺」に本来あるべき道德的教化機能を回復させるという意義があつたと考えることができる。

このように、劉玉汝は朱熹―輔廣の解釋を出發點としながらその難點を解消し、儒教的要請によりいつそう叶つた解釋として鍛え上げたのだが、そこで用いられた解釋認識は、詩は具體的なある特定の人物に詠つて聞かせ教導するために作られ、相手との意思疏通をスムーズに進め目的を滞りなく實現することを狙つた修辭表現が用られるということであつた。このような認識は、第4節で見たように嚴祭の解釋でも用いられていた。

詩篇のコミュニケーション性は、嚴祭が重視したものである。詩篇が詩人と特定の相手に對して意思傳達を行い、道德的な働きかけをするために作られ、それを實現するために、コミュニケーションを圓滑に進めることを目的としたレトリックを駆使しているという認識は、『詩緝』中の數多くの注釋に見られる。彼は第5節で見たように、詩人が本詩を事情をよく知る衛の國人と、莊姜への憐憫の情を共有しようとして作つたと考え、贊美の裏に言外の意が秘め隠されていることに氣付かせるため、「大夫夙^{はや}く退き、君をして勞せ使むること無かれ」というキーワードを意識的に挿入したと考えていた。詩人が想定する讀者についての認識は劉玉汝と異なっているが、しかし彼らの意思疏通をスムーズに行うためにレトリックを仕込んでいふという認識は、嚴祭と劉玉汝とは共通する。

さらに、劉玉汝が嚴祭から學んだのではないかと考えられるものが右の引用の中にある。劉玉汝は詩經の詩人による次のような詩の作り方を説明して次のように言う——詩篇は全體としては作者の意圖を明確に表現せず、讀者はそれを掴む端緒を容易に見つけることができないうが、作者はその鍵になる一語一句を詩中に忍ばせているもので

あり、それに氣付きさえすれば、詩人が詩句ごとに隠していた意味が一目瞭然となる——と。このような作詩法は、嚴粲によって主張されたものである。⁽⁴⁵⁾

ここから、劉玉汝は朱熹の解釋を受け継ぎつつも、詩篇のレトリックについての嚴粲の認識を取り入れることによって、朱熹の説をさらに合理的なものにしたと考えることができるのではないか。だとすれば、朱子學に立つ學者たちは、朱熹の詩説を祖述し敷衍する過程で、朱熹とは異質の態度を持つ詩經學者の解釋理念・方法を積極的に吸収し、それによって朱熹の解釋を補強していったのではないか、劉玉汝の解釋はその一例となるのではないかと、いう假説を立てることができる。

劉玉汝の説は、後世の詩經學者にも繼承された。明・鍾惺（一五七四—一六二四）『詩經鍾評』は本詩について次のように言う。

世間の情を言うには、卑しければ卑しいほどますます絶妙なものとなる。この詩を繰り返して讀んでみると、すべて常識的な事柄によって主君に望んでいる。これは、凡庸な君主に建言する方法は卑しければ卑しいほどますます絶妙なものとなるということを深く心得たものである（世情之言愈鄙愈妙、三復此詩皆以常情望其君、深得告庸主之法愈鄙愈妙）

〔題下批〕

莊姜が「緑衣」「日月」「燕燕」のように自ら作った詩には、「我 古人を思ふ（我思古人⁽⁴⁴⁾）」（「緑衣」と言い、「古處」⁽⁴⁶⁾）（「日月」と言う。このような詠いふりをしているから、ますます世間と合わなくなってしまうのだ。⁽⁴⁶⁾）それに對して、詩人が彼女に代わって詩を詠うと、まったく趣の異なった言い方をし、一言たりとも正

しい理を説教するやり方に及ぶことがない。このような臨機應變な對應のしかたが素晴らしいからこそ、「詩を學べば能く言ふ⁽¹⁷⁾」という言葉の意味が悟られるのである（莊姜自作詩則曰、我思古人、曰古處。此其所以益不合也。詩人代爲之言、另換一番說話、一字不及正理。此出脫之妙、學詩能言可以悟出）

〔眉批〕

「此の詩 皆な常情を以てその君に望むは、深く庸主に告ぐるの法を得たり」と言い、愚者に高邁な道理を説いても無意味で、彼にも理解できるような話し方をするのがよい、詩經の詩篇はそのためのよい手本だ、と言うのは劉玉汝の議論を踏襲している。とすれば、彼も嚴粲のコミュニケーションのレトリックを受容していると言うことができる。

明末清初・賀貽孫『詩觸』もやはり、

詩全體一層一層と誇らしげに讚歎しているが、莊姜の憫むべきことと詩人が彼女を憫む所以についての眞意は言わずとも傳わる（全詩層層誇詡讚嘆、而莊姜之可憫與詩人所以閱之之意、不言而喻）

と、本詩に言外の意があり、それこそが詩人の傳えたかったことだという認識を示している。彼は、

詩中で最も詩人の心に叶ったと譽め稱えているところこそが、すなわち最も心を痛めているところなのである（其最賞心處、乃其極傷心處耳）

と言ひ、言外の意が、詩句に表現されたのとは裏腹のことであると云っている。そして、本詩の言外の意については次のように言う。

　　莊姜の婦徳は言うまでもない。今彼女の作った「緑衣」「日月」「終風」などの詩を誦すれば、その言語文章は人を誰しも感動させる。莊公がこれらの詩を見たならば、當然改心したはずである。しかし、莊公はそれを理解しようとしなかった。だから、詩人はそのような詩で詠われた高邁な事柄は省略して言及せず、ただ服飾容貌車馬風土の素晴らしさのみを詠い、莊公でもやすやすと理解できることばかりこのように竝べ立てたのである。詩中で詠われている事柄であつても當時めつたにお目にかかれなほほど素晴らしいものなのだから、ましてや「詩に詠われていない」その他「莊姜の婦徳の素晴らしさ」が二つとないものであることは言うまでもない○本詩は莊姜を憫んでいるだけではなく、それに兼ねて莊公がこのような美人を手に入れながら、寵愛することを知らないことを風刺している（莊姜之徳、不必論。今誦其緑衣日月終風諸詩、其言語文章亦足動人。莊公見之、自應回心……然莊公摠不知也。故詩人略而不言。但言服飾容貌車馬風土之美、舉莊公所易知者陳之謂即如此。亦當時希有、況其他乎○此詩不獨閔莊姜、兼諷莊公有如此美人而不知寵）

　　この詩が莊公に莊姜の素晴らしさに気付かせるために作られたものであり、莊公の知力に合わせて表層的なことばかり詠ったと取っている。このように見ると、「刺る」という行爲が含む、刺る相手を善導しようという意欲、そのために相手と圓滑なコミュニケーションをとるといふ目的で使用されるレトリックという、朱熹詩經學では充分に重視されていなかったものが、後世の詩經學者にいかにも重視されたかが知られる。そして彼らはそのような觀

點から朱熹の解釋を煉り上げるために、嚴粲の説を應用しているのである。この意味で嚴粲の構築した詩經學は、朱子學全盛期の詩經學をより内實豊かにするのに大きな貢獻を果たしたといふことができる。⁽⁴⁸⁾

7 まとめ

① 「碩人」解釋史に表れた論點とその相互關係

以上、衛風「碩人」の解釋の歴史を辿ってきた。言外の意的發想を伴った解釋は、早くも鄭箋にその萌芽を見ることができたが、とりわけ南宋以降の詩經解釋においては、言外の意をいかに捉えるかが詩篇解釋の中心課題の一つとなった。

言外の意は、ある言説において言語表現化されない意味を指すが、日常感覺的には、言内の意と言外の意とが一對一のパラレルの關係で把握される。詩經の詩篇の意味を探索する作業においても、例えば現代に通常行われる詩經の原義研究であれば、やはり一つの詩句表現について一つの言外の意が對應すると想定すれば多くの場合事足りるのではないだろうか。このような場合は、言外の意は言内の意と靜的に向かい合っているとと言えるだろう。しかし、詩經解釋學を歴史的に研究する場合には、言外の意は多重であり得ると認識しなければならぬ。しかも多重の言外の意は相互に動的な派生關係をもつて繋がっていると認識しなければならぬ。さらには、言外の意の意味範圍を擴張することが必要である。

「碩人」は、小序に「莊姜を閔む」と規定されている——儒學的立場から見て、本詩の風教的本質は「莊姜を閔

む」にある——のに、詩中には「閔み」を表現する要素がないという矛盾を持つ。この矛盾を解決するための思考が、第1節で引用した朱公遷の言葉を借りるならば、「哀傷悼惜、皆な言外に在り」である。歴代の詩經學者はあるいは言外の意という術語を用いて、あるいはこの術語こそ用いないもののこの術語が表す概念を用いて、さらにあるいはこの概念そのものではないがそれと類縁性の高い考え方を用いることによって、本詩の風教的意義を解き明かそうとした。彼らの問題意識は、次のようにまとめられるだろう。

(ア) 本詩の詩句はなぜ憫んでいないのか。

(イ) 本詩は讀者にどのように憫む思いを傳達しているか。|| 讀者はどのように憫む思いを感得できるのか。

この問題意識が言外の意に對する認識に関わるものであることに着目すると、右の二つの問題から次のような問題が分岐する。

(ウ) 誰に感得させるための言外の意か。|| 本詩は誰に向けて作られたか。

(エ) なぜ思いを言外の意という形に託したのか。

また、「碩人」には詩に詠われているのは皮相な事柄に限られ、莊姜の内面の美德には一切觸れられていない、という特徴がある。そこから、

(オ) なぜ莊姜の内面の美德に觸れないのか。

という問題意識も生まれる。さらに、(ウ)の誰に向けられて作られたかという問題意識を持って小序の「閲む」を見直した結果、

(カ) 本詩は本當に憫むために作られたのか、他の目的がなかったのか。

という問題意識が生まれる。詩篇と作詩の意圖との間の乖離に言外の意を読み取ることにより、問題意識が増殖していく。

増殖するのは、解釋者の問題意識だけではない。(カ)からわかるように、言外の意それ自體も増殖をする。増殖の結果、言外の意は多重性を有するようになる。この現象は第2節で論じたように、漢唐詩經學の段階ですでに起こっていた。すなわち以下の通りである。

詩句 莊姜を美め稱える

……「言内の意」

詩句に込められた「今にして答へられず」「君何爲れぞ之に答へざるや」という思い

……小さな言外の意

小序 莊姜を憫む

……大きな言外の意

詩句と小序との懸隔は、言内の意―言外の意という一對一の關係では埋めきれず、その仲介をするもう一重の言

外の意を想定しなければならぬという考え方である。⁴⁹⁾

朱熹（彼も本詩小序については詩の本旨を得ていると評價した）とその詩經學を繼承する者たちにあつては、次のような「言外の意の多重性」が見られる。

詩句

莊姜を美め稱える

……「言内の意」

小序

莊姜を憫む

……詩の言外の意

讀者が讀み取るべき教え

莊公を刺る

……小序の言外の意

小序は本來、詩篇の本旨についての情報を詩の外部から讀者に伝えるものであるが、その外部的存在である小序の記述自體に言外の意が潜んでいると想定し、そうして小序の言外の意を突き止めることによって詩篇の本義がはじめて明らかになるという解釋のあり方に注目したい。

さらに、嚴粲においては右とはやや異なる形で言外の意の多重性が認識されていた。

詩人が想定する讀者には言わずとも傳わるから言わないという言外の意⁵⁰⁾後世の讀者にとっては謎として現前する。

そうではあるが、仲間内であつても作者の意圖に確實に氣付いてもらいたいがために、あえて仕掛けとして仕込まれた言外の意

ここでは、作者の思考の振幅が異なる性格の言外の意を混在させることになっている。それにより詩全體の屈折が増幅される、そのような形の言外の意の重層性もあるわけである。歴代の詩經注釋においては、様々な形で複數

の言外の意が詩内部に混在しているのである。⁵⁰⁾

② 詩經の道德的要請と言外の意

通常の認識では、言外の意とは作者の意圖したことであるが、詩經の詩篇ではそうとは限らない。それはなぜかと言えば、ひとえに中國世界において詩經が儒教の經典であり人々に道德を教える存在だと考えられていたことに起因する。詩經が道德的權威を持った存在として天下に屹立している以上、當然すべての詩篇はそれぞれ道德性を持ったメッセージを發信しているはずであり、それを正しく受信し人々に傳達することが詩經解釋に求められた最大の任務となる。その任務を果たすためならば、詩篇という言葉的實體の枠を越えて「意味」を求めるとも、注釋者はためらわなかった。このようにして、作者の言外の意から詩篇の本義を考えるに止まらず、小序の言外の意をもって詩篇の本義を解釋するという態度も生まれたと考えられる。このことは、儒教の經典の一つである詩經の解釋學における言外の意の本質を捉えるためには、作者の意圖に限定しては不可能であるということを示している。詩經が儒教の經典になったその時から、言外の意は作者の手から離れ、「儒教」の手に引き渡されたのである。

これによって詩經解釋學の中には、言外の意が誰によって作り出されたものなのかという問題意識が生まれることになった。「碩人」解釋においては、このような問題意識が例えば、わざと皮相なことばかり詠いながらその言外の意に眞意を秘める、そのような詩人が實際に存在していたと考えられる解釋と、そのような詩人は實在していたのではなく、誰かによって作り出された虚像であると考える解釋というヴァリエーションを生んでいる。

朱熹と孫鑣の「碩人」解釋を對比してみよう。両者は、本詩の表現内容は莊姜に對する稱贊で一貫しているとい

う点では理解を同じくする。また、本詩の表現内容は稱賛であるが、本詩の道徳的意義は莊姜に對する憐憫という点にあると考える点でも同じである。兩者の説の分岐は、憫んでいるのは誰と考えるかというところにある。

朱熹は、作者が憫んでいる、すなわち現在の莊姜の不幸な様を憫んだ人間が本詩を作ったと考える。それに對して孫鑛は、作者が莊姜を憫んで本詩を作ったわけではなく、國史または太師、あるいは聖人〓孔子が、後世の人々が本詩を読んで莊姜を憫むことを企圖して本詩を選択保管したと考える。

朱熹が用いた、詩中で過去を讚美する裏にそれが失われてしまった現在の状況を歎じているという考え方を、言外の意という認識による解釋とすることに異論は出ないであろう。「碩人」という詩は作者が込めた言外の意によって道徳的な意義を發揮しているのである。

一方、孫鑛の解釋ではどうだろうか。孫鑛は詩人が詩の言外に何らかの思いや意圖を込めたとは考えない。本詩の作者は、彼が現に目にしている莊姜の優美さ豪華さに驚き見惚れ、ただただ感歎しているだけである。しかし、本詩は詩經の一篇としてある以上、道徳的な意義を持たなければならぬ。この道徳的意義は、本詩を読むことによって、その都度讀者の心の内に生じることになる。孫鑛が本詩題下に記した「莊姜を閲む」という注は、本詩を讀んだ者の心に當然生まれるべき道徳的な感情を、讀者に指針として豫め示したものである。それは作者の意圖したものではないにせよ、詩經の一篇としての本詩の存在意義そのものである。詩經を儒教經典として尊崇する態度からすれば、詩篇が讀者の心に惹起させる「莊姜を閲む」という思いを、「碩人」の言外の意と言ってもやはり許されるように思われる。

朱熹にせよ孫鑛にせよ、莊姜を憫むという事柄は詩句表現の外部に屬すると考えている。であるならば、朱熹にとっての「莊姜を閲む」を言外の意とするのであれば、孫鑛にとってのそれも同じく言外の意と見なしてもよいの

ではないか。なぜならば、それらは同じく本詩が儒教のテキストであるための存在意義そのものだからである。

③ 歐陽脩「本末論」と言外の意の多重性との関係

第1節で述べたとおり、黄忠慎氏が嚴粲詩經學について指摘した、言外の意が詩篇の表現内容と小序の規定との間の乖離を説明するために用いられることが多いというのは、詩經解釋學史全體に一般化して論じるべき重要な問題提起である。

嚴粲の認識では、小序は民間や朝廷で詠われていた民謠や儀式歌を収集した時に王朝や諸國の國史が附けたもの、あるいはそれらを選択収集して詩經を編纂した孔子が附けたものである。兩者いずれも既存の詩篇を讀んだ上で小序を著したのであり、彼らはまずは詩篇の讀者であった。したがって、氏の言う詩篇の表現内容を「作詩の意」、小序の規定を「讀詩の意」と呼ぶことが許されるだろう。さらに、本稿で見たように歴代の諸家は言外の意を詩篇についてだけではなく、小序についても見出だしてきた。このような状況を反映させるために、筆者は詩經解釋學における言外の意を、

作詩の意としての言外の意

讀詩の意としての言外の意

と分類したい。

このような二種類の言外の分岐はなぜ生じたのであろうか。作者の意を越えた言外の意の生成の場から見ていこう。

歐陽脩「本末論」は、詩の意味を「詩人の意」「太師の職」「聖人の志」「經師の業」の四層に分け、「詩人の意」と「聖人の志」とを「本義」とした⁽⁹⁾。彼にとつては、いや詩經が儒教の經典として詩經がある限り、作者の意だけが重要なのでなく、聖人の志も同様に重要である。

このうち聖人の志とは、詩經を編纂した孔子が詩篇を讀むことによつて人々に受け取ってもらいたかつた道德的教えのことである。「本末論」に次のように言う。

詩に詠われた美と刺とを見極め、その善と惡とを認識し、それによつて善を勧め惡を戒める、これが「聖人の志」であり「本」である（察其美刺、知其善惡、以爲勸戒、所謂聖人之志者本也）

聖人が勧め戒めるものごときは、詩人が美め刺るものである。であるから、詩人の意を知れば、聖人の志は感得できるのである（若聖人之勸戒者、詩人之美刺。是以知詩人之意則得聖人之志矣）

引用の後半部分を讀むと歐陽脩は、孔子が詩篇の道德的教えとしたのがすなわち詩人が詩に込めた美刺であると言ひ、詩人の意と聖人の志との距離を極小に見積つているとは考えられるが、しかしそれでも前半部を見ると、詩人が詩に込めた美刺の評価を推察し詩の内容の善惡を知覺し、それを道德的教えと受け取つたのが「聖人の志」であると言つているので、「作者の意」とは位相が異なると認識していることがわかる。歐陽脩にとつても、「聖人の

志」は詩篇の外部的存在なのである。³²⁾

詩經解釋における言外の意の多重性の問題を考える上では、歐陽脩が「聖人の志」を「詩人の意」と並べて詩の「本義」だと認識していることが重要である。これは、詩の内部的意味と外部から賦與された意義とを等價と考える道を開くものだからである。さらに、歐陽脩の言う「聖人の志」とは、「歐陽脩が自分の意をもって推し量ることができるもの」³³⁾である。これを援用すれば、後の注釋者それぞれが詩篇の表現の裏に秘め隠されているものと考えた道徳的教え——換言すれば言外の意——を、詩の本義だと主張することが可能となる。さらに一步を進めれば、かりに作者の意圖から外れるものとわかつていても、それが儒教道徳的な効用を持つものであれば、詩經の一篇たる詩篇の本義と見なして重視することにも通じるだろう。後世の人間が詩篇を讀んで心に抱いた道徳的思いをも詩經の詩篇としての本質的な價值を持つと考え、言外の意として本義に組み込む態度である。本稿から例を挙げれば孫鑣の説、詩人は婚禮の時の莊姜の豪華華麗さにひたすら感嘆して詩句を綴っているだけなのだが、後の世の本詩の讀者が歴史的知識として知っている莊姜の成り行きを思い起こし、そのあまりの落差に思わず憫みを抱いてしまう、それが本詩の道徳的意義だとしてゐるのがそれに當たる。³⁴⁾

この考え方をさらに發展させれば、ある詩篇にまつわる儒學的思考すべてが言外の意となる可能性が生ずる。また、詩句から發想した道徳的教訓は詩篇全體の意味とは關わりなく、すべて言外の意と認定することにも繋がる。すなわち「斷章取義」である。前稿で紹介したように、朱熹には斷章取義を「言外の意」と呼んだ例があるのは、³⁵⁾このような考え方が具現化したものと位置づけることができる。

④ 言外の意を用いた詩経解釋學の諸概念の關係づけ

このように、言外の意を擴張して用いることが詩経解釋學史を考察するのにも有意義ではないかと、筆者は考えている。第3節で、朱熹の説を考察して、朱熹は彼自身が批判的であった陳古刺今的な解釋を本詩においては用いたことを指摘した。また、孫鑛の説を考察して、それが朱熹の「淫詩説」と同構造だと指摘した。これを言外の意の多重構造に重ね合わせて見直してみると、陳古刺今説と淫詩説とを同心圓の内円と外円とに付置して考えることができる、すなわちこの二つの説は同一の解釋學上の要請に應える同じ性格を有する理論であり、それが異なる姿で現れるのは、そこに「詩を以て詩を解す」という解釋理念が介入するかしないかに起因していると説明することができる。このように、詩経解釋學にまつわる様々な解釋理念を共通の觀察軸に位置付けつつ、そこにどのような認識が影響することによって生み出されたかという考察の仕方ができるようになるのではないかと期待している。

言外の意を擴張して考えることはまた、古典中國における詩経の讀まれ方をよく反映していると言うこともできる。言外の意の「言」とは何か、これは、詩経を讀むとはいかなる行爲であるのかという問題に關わる。漢唐詩經學においては、詩経の詩篇は小序とは切り離すことができず、セツトにして讀むべきものであった。そうであるならば、詩篇の言外の意を小序に表現されない事柄まで含めて考えることは當然起こり得る。

小序が絶對的な權威性を喪失した宋代以降は「詩を以て詩を解す」という讀詩態度が喧傳された。これからすれば、漢唐詩經學の「『小序＋詩篇』＋言外の意」というように、外部的存在を取り込んで詩篇と一體化させる思考はもはや跡を絶ったと思われるかもしれない。しかし、『集傳』が權威的注釋となつた元代以降、詩経の詩篇の風

教的意義を説明する存在として、朱熹の解釋自體が小序と同様の地位に置かれることとなった。⁵⁶とすれば、朱熹の考えをより詳細に理解するために『集傳』の言外の意を探るといふ解釋の方向性が出現することは必然的であるだろう。實際に、第6節で見たように、元代の詩經學者は嚴粲の詩經解釋に見られる思考法を援用して、朱熹の解釋の意圖するところを敷衍していた。

この現象をさらに推し進めれば、ある時代、ある學者が權威と認める先人の解釋の言外の意を想定することで、詩經の正しい意味を説明するということが起こる可能性があることになる。例えば、第3節で毛傳獨尊の旗幟を掲げ宋代詩經學を排斥した清・陳奐の「碩人」解釋において、朱熹の解釋に見られる陳古刺今的認識が用いられた例を見た。陳奐は、毛傳には一言もされていないにもかかわらずその言外の意を汲んで、毛公は實は陳古刺今的認識に基づく解釋を行っていたと考えて敷衍をしたことになる。

當然と言えば當然すぎることであるが、先人の解釋をもとにして解釋を緻密化し膨らませていく、しかも往々にして先行の解釋に極めて高い權威が與えられ、その説を絶対的に正しいものと考えそれを遵奉しつつ自身の解釋を施していくことが一般的であったという歴代の詩經解釋のあり方は、先行の學者の言外の意を読み取り、それを詩篇の眞實の意味と見なす姿勢を導き出す。これから考えれば、詩經解釋において言外の意が「作者」という枠を超越し、外部的存在を取り込みつつそれを内部化するというのは必然的な事柄である。詩經解釋學においては本來、詩の内部と外部とを隔てる境界は曖昧なのである。これは例えば、細胞膜のようなものに喩えて考えることができるかもしれない。細胞の内部に満ちた液體と細胞が浸された外部の液體とは細胞膜によって隔てられているが、その浸透壓の變化により、お互いはたやすく細胞膜を越えて内外に移動し合う。そのように、儒教經典の一部として詩篇が必ずや持たなければならぬ道德的意義がどこから發生すると考えるか——作者の考えか、讀者の反應か、

權威的な注釋かなどなど——によって、どこまでを「言内の意」としどこからを言外の意とするかの認識上の境界も自由に移動すると言えるのではないだろうか。

⑤ 言外の意の道德的機能と文學的解釋への寄與

言外の意は、相關聯しつつもそれぞれに特色のある一連の解釋を芋蔓式に次から次へと生み出す。本稿で通觀した「碩人」解釋史に則してその機序を考えてみよう。「莊姜を閔む」という言外の意は、なぜ詩人が自分の意圖を直接的に詩句に表さず、輜晦や婉曲といった表現手法を用いたのかについての興味關心を醸成した。そして、この問題の解明を圖つて、詩人や登場人物の性格や心理を分析するという解釋のあり方が生まれ、それが詩經の讀解方法の發達に新しい可能性をもたらしたと見ることができる。

例えば、朱熹が第三章『集傳』で言う、「今の然らざるを歎くなり」とは、直接的には莊姜の境遇を歎くということである。しかし、その一方で彼は首章『集傳』で「重く莊公の昏惑を歎くなり」とも言う。作者が莊姜の境遇を歎くと同時に莊公の暗愚を歎いて本詩を作ったと考えるのである。このような考え方は、『集傳』のみならず他の學者の解釋にもしばしば見られる。しかし、莊姜の不遇と莊公の狂惑は表裏一體とは言え、嚴密に言えば別箇の主題である。どちらに讀解の力點を置くかによって、本詩は異なる感情と雰圍氣で満たされることになる。

朱熹―輔廣（および第6節で見た徐光啓・沈守正。以下、記述を簡便にするため、朱熹『集傳』に一元化して論ずる）の解釋では、詩人の莊姜を憫む視線は手段としてあるに過ぎず、その裏に主君莊公に對する反感・輕蔑という厳しい目が存在しているということになる。『集傳』の場合には、莊公に對する批判を讀み取りながら彼を教化

しようとする作者の意欲についての言及がなされていないために、作者の彼に對する蔑視は一層剥き出しの形で現れることになっている。

それに對して、嚴柁の解釋では、莊公の暗愚という條件下で詩人が自分と同じ感情を抱く人々たちと莊姜の不遇に對する同情を共有しようとして本詩を作ったという解釋がなされる。莊公の狂惑が背景に退き、莊姜の不遇に對する同情が前景化している。そのため朱熹の理解に比べ、作者の視線が柔らかで優しいものとして捉えられている。

さらに下つて元・明・清初になると、第6節で見たように劉玉汝、鍾惺、賀貽孫の解釋では朱熹の説に従つて本詩の中心人物が莊公とされているが、莊公に對する批判のための批判に終わるのではなく、莊公を教化するという要素が視野に入ってくる。その際に、莊公が暗愚であるということを前提條件として受け入れた上で、彼の反省を促すためにはどういう方策をとるべきかという觀點から本詩の表現面での特徴——ひたすら皮相な美點を稱贊することに終始して、莊姜の内面の美質には一切觸れないという特徴——に新しい解釋がなされる。朱熹——輔廣においては、表面的な美點さえ認識しない莊公の愚かさをあげつらうための表現と考えられたのが、莊公の知力でも認識できる美點にその目を向けさせることで、彼の莊姜への態度を改善させようとする作者の努力の現れとしての表現と讀み換えられる。注釋者は、批判の對象である人物の個性を分析しそれに對應した表現技法を讀み取ろうとしている。ある意味でステレオタイプではない人間理解を試みようとしているとも見ることが出来る。

このような多種多様な解釋が生み出さる要因の一つは、本詩の小序に言う「閔む」という思いの不安定さに求められるだろう。本稿で見てきたように、莊姜への憫みを主題に据えた解釋は、不幸を憫むにふさわしい莊姜の美質を「美む」る讀み取りへも、莊姜を憫むべき立場に追い込んだ張本人を「刺る」讀み取りへも展開可能である。そうした中で、儒教經典としての詩經が有する美刺という體系の中で解釋する立場からすれば、「閔む」の裏にある

風教としての意義を考える必要がある、そこから莊姜を「閔み」の対象に追いやった原因を究明し批判せざるを得ないことになる。このような儒學的解釋自體が、言うなれば「序の言外の意」の読み取りを要請していると言うことができる。

黄忠愼氏が言うように、詩經解釋における言外の意は、第一義的には詩經の持つ道德的機能を実現するということであつた。しかしそれは、詩篇の文學的考察とまったく無關係であつたということにはならない。主として道德的意義から生み出された解釋概念が、本來の意圖を越え、詩經の文學性を追求する態度を促進する役割をも果たしたことの一例に、「碩人」注釋の歴史はなるだろう。またこのことは、詩經解釋學史においては、その道德的性質と文學的意義とを分離して考えることができないということを表すものである。

⑥ 詩經解釋學の歴史を把握するための言外の意

「言外の意」を考察することは、劉毓慶氏が提起した「經學から文學へ」⁵⁷という詩經學の學的志向の變化の問題を考える上でも大きな意義を持つ。文學研究としての詩經學をどのように定義するか、それをいわゆる經學研究としての詩經學とどのように區別するかについては議論があるだろうが、文學的志向性を有する詩經注釋という一箇のジャンルが明代後期に確立したという考え方を受け入れるとして、「言外の意」認識という觀點は、劉毓慶氏が朱子學の敷衍であり經學的詩經學⁵⁸の段階に留まっていたとする元代と明代前中期の詩經注釋書が、「經學から文學へ」という學問的展開に寄與するところがなかったかについて再考を促すものである。

我々は、朱熹の詩經研究の祖述という性格を強く持つ元代の注釋書の中にも、朱熹とは性格の異なる嚴粲の解釋

が直接的に、あるいはその理念や方法論を援用するという形で取り入れられているのを見た。特にそれは、莊公の扱いたいという問題について顯著に見られた。

本詩の主人公はもちろん莊姜ではあるが、詩篇の表現のあり方を左右する最大の要因と考えられてきたのは、むしろ夫の莊公であったと言つてよい。莊公の暗愚で粗暴な性格が、莊姜をどの時點でいかなる境遇へと追い込んだか、衛の國人は莊公が莊姜にした仕打ちをどのように受け止めたか、また莊公という主君をどう捉え取り扱ったか、そして國人の一人である詩人が、誰に對するどのような表現を用いたいかなる思いやメッセージを込めて本詩を作ったか、これらの根本に常に莊公が居座っている。詩人がひたすら卑近卑俗な表現を用いて、言わんとすることをすべて言外の意によつて傳えようとしたのは、ひとえに莊公の存在があつたからである、歴代の學者はそのように考え、本詩を注釋した。莊公の人間像に對する關心が本詩の言外の意の存在を確信させ、それぞれの解釋を支配してきたと言ひ換えてもよいだろう。

本詩のこのような解釋のあり方を典型的な形で示したのは嚴粲であつた。彼は、言外の意を読み解くことと、詩が詠う對象、あるいは詩の讀者に對する作者の關心、心遣いを読み解くことを關聯させて解釋を行った。それは後世の學者に大きな影響を與え、元代の朱子學的詩經解釋においても、『集傳』に見られる解釋の隘路から脱出するために、嚴粲の讀解の視點を援用したと思われる手法を用いていた。その中で、劉玉汝のように、詩人が莊公の性格を見極め、それに對應した教誨の方式を案出し、それを修辭技法に反映させ本詩を作つたと考える注釋も生まれている。このような人間はこのように扱つたらこのような反應をするという人間の性格に對する分析的姿勢を見ることができらる。

もちろん、それはあくまで教化の對象という觀點からのみ見た人格分析であり、窮屈で自由度の低い思路にすぎ

ないと言われればその通りではある。しかし、このような解釋姿勢により學者は、人間の性格と心理に對する關心を持つようになった。詩篇の登場人物、あるいは關係する人物を多様な人間類型によつて捉え、それが詩作のあり方を決定したと考へ解釋するのは、文學的分析とはまったく無關係のものとは言えないであろう。そのような解釋を『集傳』の祖述を旨とする元代および明代前中期の學者がすでに行つていたのである。これが、明代後期における「文學的詩經學」の百花齊放に道筋を開いたとするのは、けつして無理な考え方ではないと思われる。

ひいては、明代後期の學者たちが詩經を「文學」として讀むことが可能になるための、解釋方法の面での基盤を提供したという意味では、文學的解釋の道は、より遡つて宋代からすでに開かれていたという見方も成り立つであろう。鍾惺・賀貽孫などの解釋に、宋元の解釋から受け継いだ考え方が見られたことはその一例である。このように見ると、文學的詩經解釋の中にも「經學的」詩經學から發展した要素は思ひのほか大きいということになるかもしれない。

これは、詩經學において文學性を重視した研究のあり方は傳統的な經學の形と切り離されたところに生じたのではなく、むしろ儒學的要請に基づいて生まれた問題意識と、それを解明するために編み出された解釋の方法論から生まれ育つていったことを示唆するものである。このような捉え方は、「經學から文學へ」から「文學から經學へ」への再度の轉換が起こつたことについての考察にも寄與するものと思われる。すなわち、宋元から明への詩經學において文學的なアプローチの度合いが次第に増していったということが「經學から文學へ」という變化であるという把握が成り立つとすれば、明の後を受けて清代に、宋元明の詩經學に否定的な考證學的詩經研究が全盛になつたという歴史過程についても、文學性の強い詩經解釋學の中に埋もれがちになつてきた經學的要素がその存在意義を再認識され「文學から經學」へという變化が起こつたという見方もできるのでないだろうか。このように、

「文學的詩經學」と「經學的詩經學」とを斷絶ではなく繼承發展の相によって、あるいは詩經學の中に含まれる諸要素の比重の變化という視點によつて捉えることが可能になると思われる。本稿の例で言えば、戴震の説が嚴粲の影響を濃厚に受けていることなど、元明詩經學が嚴粲から學ぶところが大きかったことを思い合わせれば、そこにある種の學問的系譜を見出だすことができるだろう。ひいては毛傳墨守の立場に立つ陳奐の説が朱熹の陳古刺今的解釋を踏襲していることにも、やはり、明代の詩經學の餘波がなかつたとは即斷できないように思う。言外の意識がどのように發展していったかを考えることは、南宋以後の詩經解釋學の歴史を動かした學的志向性を明らかにする上で重要な意味を持っている。

このように、詩經解釋學史に新たな光を當てるために、「言外の意」という問題は豊かな可能性を持っていると筆者は考える。

注

- (1) 拙稿『「言外の意」の遠近法——その多様性、および詩經の意味の重層性における位置付け——』（慶應義塾大學日吉紀要『人文科學』、第三五號、二〇二〇年六月）。
- (2) 黃忠愼『嚴粲詩經新探』（臺灣、文史哲出版社、二〇〇八）。
- (3) 前掲書二〇頁。
- (4) 「言外の意」に對する概念としての「言内の意」は語として熟しているわけではないが、黃忠愼氏前掲書に、「與『言外之意』相對的就是『言內之意』、一首詩如果同時具有言內與言外二種『意』、則何者才是這首詩真正的『意』？顯然的、傳統的文論家或讀者、都以『言外之意』爲他們論說闡述的重點」（二九頁）と言い、安井稔『新版 言外の意味』上冊「はしがき」に、「言外の意味というのは、定義上、言内の意味ではないものである。言内の意味というのは、

その表現形式が、ある意味では恣意的に、しかしながら固有のものとして、もっている意味である」(言語・文化選書1、開拓社、二〇〇七、はしがきvi頁)と言うように、「言外の意」を考察するための對概念として缺かせないものである。筆者も諸家の用例に従って用いる。

(5) 以下のようなものがある。

・拙著『詩經解釋學の繼承と變容——北宋詩經學を中心に据えて——』(研文出版、二〇一七) 第二十章「訓詁を綴るもの——陳奐『詩毛氏傳疏』に見られる歐陽脩『詩本義』の影響——」

・「振り捨てきれない遺産——戴震『毛鄭詩考正』における宋代詩經學の引用の意義」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十號、二〇一七年三月)

・「同情と配慮のレトリック——戴震『毛詩補傳』に見られる嚴粲詩經學の影響——」(『日本宋代文學學會報』、第三號、二〇一七年五月)

・「纂奪者に獻げる讚歌——類淫詩説を廻る朱熹・嚴粲と戴震・翁方綱との關係——」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十二號、二〇一九年三月)

・「詩のわからなさに向かいあって——戴震との比較から見た翁方綱『詩附記』の特徴——」(『中國——社會と文化』、第三四號、二〇一九年七月)

・「すべて本義のために——翁方綱の斷章取義説の性格とその詩經學史的位置付け——」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十三號、二〇二〇年三月)

(6) 詩經の詩篇の受容のしかたとしては、讀む以外に聴くという形態も當然あり得るが、本稿では敘述を簡明にするために「讀者」という呼び方で統一する。

(7) 本稿の考察は、この詩についての歴代の詩經注釋の比較を主たる手法とする。このような考察を進める上で、『詩經集校集注集評』(魯洪生主編、現代出版社、二〇一五)に大きく依據することになった。同書には、詩經の歴代の注釋書の説が項目ごとに整理收集されており、本項の考察の基礎的作業を肩代わりしてくれる文献となった。筆者としては、この労作に依據しつつ、そこに收集された經説を洗い直し、その相互關係について思考を深めるという方法を

とることが可能となったこと、感謝の意を表する次第である。

(8) 魯頌「閼宮」の「松栢有芻、路寢孔碩」の毛傳に、「路寢、正寢也」と言う。本詩毛傳が君主の政廳として「路寢」、夫人の政廳として「正寢」を配當していることの根據は未詳。

(9) 本詩『正義』は、三つの章で「不答」「不見答」という言葉を使って詩句を解説している。本文で挙げた第三章の他、首章に「容貌既美、父母兄弟正大如此、君何爲不答之也」と言い、卒章に「此爲莊姜不見答而言」と言う。

(10) 本章『正義』の劈頭に、「碩人至君勞○毛以爲……」と本章全體についての毛公の解釋を示す最後に「此言莊姜容貌之美、皆用嫡夫人之正禮、君何爲不答之乎」と言う。なお、この下で「鄭以爲……」として傳箋異説の箇所について説明するが、ここで問題になっている部分は含まれておらず、「餘同」と言っている。

(11) なお、朱熹の解釋について、『呂記』に興味深い資料が存在することを附言したい。本詩本章の『呂記』には「朱氏曰」と言つて、朱熹の解釋が引用されている。それは基本的には『集傳』と同じ内容であるが、ただ引用は「不得與夫人相親也」で終わっていて、「歎今之不然也」という句は見られない。周知のとおり、『呂記』所引の朱熹の詩説は彼の早年の解釋である。と言うことは『呂記』の引用は、朱熹が時間性に對する問題意識を取り入れて本詩を解釋するようにになったのは後年になってであることを示している可能性がある。もちろん、呂祖謙が自分の意に従つて本來の朱熹の詩説を省略して引用した可能性もあるが、朱熹の詩經解釋の變遷を考へるための資料として指摘しておきたい。

(12) 「陳古刺今」「思古傷今」については、筆者は以前詳しく考察したことがある。前掲拙著二〇一七、第十四章「詩を道徳の鑑とする者——陳古刺今説と淫詩説から見た詩經學の認識の變化と發展——」参照。

(13) 檀作文『朱熹詩經學研究』第一章第二節（中國詩歌研究中心學術叢刊、二〇〇三、學苑出版社）。

(14) 『春秋左傳正義』（十三經注疏整理本第十六冊、北京大學出版社、二〇〇〇、九〇頁）。

(15) 前掲拙著二〇一七、第十一章「それは本當にあつたことか?——詩經解釋學史における歴史主義的解釋の諸相——」参照。

(16) 「詩序辨説」を見ると、「綠衣」に「此詩下至終風四篇、序皆以爲莊姜之詩、今姑從之、然唯燕燕一篇詩文略可據耳」

と言ひ、「日月」に「此詩序以爲莊姜之作、今未有以見其不然」と言ひ、「終風」に「詳味此詩、有夫婦之情……若果莊姜之詩、則亦當在莊公之世」と言ひ、細部では異論を立てるものの、小序に従ひ莊姜の自作詩としている。

(17) このことを間接的に示す資料として、清原宣賢の『毛詩抄』がある。同書卷三の本詩第三章の前五句までに對する講述に次のように言ふ。

かう云心は、嫡夫人の禮をちとも違へいで、衛へ寄せたを、莊公の用られぬはあつたらしい事哉。是程禮義の正いを曲もないとかう云心ぞ。

宣賢は、『正義』の解釋に従ひ、鄭箋の「今而不答」を解釋に反映させておらず、莊姜が衛に嫁いでやつて來た當初から、莊公は彼女を正當にもてなさなかつたと解釋していると考えられる。鄭箋と『正義』との異説並列の中から、『正義』の説を選択的に取り上げていると言ふことができる。ここからも鄭箋の「今而不答」が一般的に取り入れられていたわけではなかつたことが窺われる。

(18) 陳奐は、一般に莊姜の輿入れの様子を詠つたと解釋される「四牡有驕、朱幘鑣鑣」を、莊姜を迎えに來た莊公のことを詠つたものとする。

案ずるに、上の「碩人敖敖、説于農郊」、下の「翟弗以朝、大夫夙退、無使君勞」はいずれも夫人について言つたもので、この二句は莊公について言つたものである。故に毛傳は「朱幘」を「人君の馬飾」としている。これは莊公が自ら夫人を迎えたことについて言っているのである(案、上下文皆就夫人説、此二句就公説、故傳以朱幘爲人君之馬飾。此就公親迎夫人而言之也)

さらに陳奐は、鄭箋には莊姜が輿入れの時に乗つた馬車の豪華さを詠つたとされる「翟弗以朝」の句を、結婚後の莊姜が日頃キジの羽根で飾つた馬車に乗つて朝廷に向かう様子を言うとする。

陳奐の解釋では、本章の敘述を莊姜の輿入れと結婚後の日常という二つの場面を前後に配し、彼女を迎える莊公と臣下によって丁重にもてなされていることに言及されるという整然とした構成をもつことになる。それによって新婚のころの莊姜が衛君にも衛の國人にも歓迎され幸福であったことが印象づけられ、その分、夫の愛を失つた現状の不遇が言外の意として強調されることになる。これは、鄭箋が前五句までに「今にして答へられず」と注したことによ

り「大夫夙退、無使君勞」の位置づけが曖昧になってしまっていた難点を解消し得たものと言うことができる。

(19) 『列女傳』を撰した劉向の祖先の楚元王は魯詩を講じた魯人申公から詩經を學び、その子孫も魯詩を奉じた。『漢書』卷三六「楚元王傳」に詳しい。

(20) 『後漢書』卷三五「鄭玄傳」に「時任城何休好公羊學、遂著公羊墨守、左氏膏肓、穀梁癡疾。玄乃發墨守、鍼膏肓、起癡疾。休見而歎曰、康成入吾室、操吾矛、以伐吾乎」(中華書局排印本、第五冊一二〇七頁)と云う。

(21) 趙玉強『慈湖詩傳』——心學闡釋的「詩經」學(中國社會科學出版社、二〇一五)。

(22) 『楊簡認爲「道」即在日用常行之中、就在淺近的人心之中、『叔于田』的主旨就是反映人們對公叔段的贊美與敬愛之心、亦即反映道心』(同右、五二頁)。

(23) 以下、本節と次節における嚴粲の言外の意觀、また戴震の解釋についての考察は、前掲拙著二〇一七、第十六章「作者の意圖から國史と孔子の解説へ——嚴粲詩經解釋における小序尊重の意義——」、前掲拙稿二〇一七年五月、拙稿「より深く潛水しより自由に游泳するために——嚴粲詩經學における小序尊重の意義 その二——」(慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十一號、二〇一八年三月)、前掲拙稿二〇一七年五月を參照のこと。本稿では彼らの言外の意觀が詩經解釋學史において、前代の何を繼承して成り立ち、後世の詩經學にどのような経路をもつて影響を與えたかを考えることを主眼にしている。論述には前稿と重なるところがあるが、本稿の課題を考えるために必要と考えてあえて重複を避けず論じた。

(24) 本詩首章は以下の通り。

碩人其頤 碩人 其れ頤たり

衣錦褻衣 錦を衣 褻衣せり

齊侯之子 齊侯の子

衛侯之妻 衛侯の妻

東宮之妹 東宮の妹

邢侯之姨 邢侯の姨

譚公維私 譚公維れ私むじなり

- (25) 嚴粲は、小序第一句は國史と孔子によつて作られたもので従うべきであり、第二句以下は後世の學者が敷衍したものでままた誤りを含むと考へていた。これについては、前掲黃忠愼二〇〇八、および前掲拙著二〇一七、第十六章参照。
- (26) 『孟子』「萬章下」に、「頌其詩、讀其書、不知其人可乎。是以論其世也。是尚友也」と言う。
- (27) 『論語』「爲政」、「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」。
- (28) 『戴震文集』（中華書局、一九八〇）一四七頁。
- (29) 拙論「戴震の詩經學——『杲溪詩經補注』の立場と方法——」（『日本中國學會報』第四四號、一九九二年十月）参照。
- (30) この兩者の關係については改めて考察してみたい。
- (31) 前掲拙著二〇一七、第十六章参照。
- (32) 邶風「凱風」第三章『詩緝』に、「有子七人、反不能養一母、使母勞苦而求嫁、是寒泉之不若。負罪引慝也」と言う。また『詩緝』は「朱子曰」と、「母欲嫁者本爲淫風流行、而七子乃以勞苦爲說。可謂幾諫矣」という朱熹の説を引用している。この詩についての嚴粲の説と朱熹の説との親近性、繼承關係が窺える。なおこの部分の『集傳』は、嚴粲の引用したものは同趣旨ながら文章が若干異なり、「而有子七人、反不能事母、而使母至於勞苦乎。於是乃若微指其事、而痛自刻責以感動其母心也。母以淫風流行、不能自守、而諸子自責、但以不能事母、使母勞苦爲詞、婉詞幾諫不顯其親之惡、可謂孝矣」とある。嚴粲の引用が『集傳』以前の朱熹の説に據る可能性もある（拙稿「嚴粲詩緝所引朱熹詩說考」、慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第七號、二〇一四年三月も参照されたい）。
- (33) 國風の詩篇は眞意を露わに表現しない傾向があるが、しかし、秘められた眞意を明らかにする鍵が潜んでいる場合が多い、というののは嚴粲の解釋にしばしば見られる考え方である。前掲拙稿二〇一七年五月参照。
- (34) 前掲拙著二〇一七、第十四章参照。
- (35) 『凱風』第三章『正義』に、「母親がよその男に嫁ごうとしたのは、本來は淫亂な風氣が流行しているのに感染したためであるが、七人の子は直接に母親の淫らな振舞いを言うわけにはいかなかったため、故に『母親が苦勞ばかりしている』と『生活の安定を求めてよその男に』嫁ごうとしている」と言ったのである（母欲嫁者、本爲淫風流行、但

七子不可斥言母淫、故言母爲勞苦而思嫁也」と言う。注(32)に引いた朱熹『集傳』は『正義』の説をもとに、さらにそこに用いられたレトリックを説明して、「子供たちは自らを責めて、『……七人も子供がいるというのに、かえって母親のお世話をすることもできず、母に苦勞ばかりかけるに至ってしまった』と言う。このようにして、その『母親が淫らな欲望に驅られている』ことを微かに指し示しながら、厳しく自分たちを責めることによって母親の心を感動させようとしたのである……婉曲な言葉でそれとなく諫め、自分の親の悪事を顯わにしないのは孝と言うべきである」と言う。この朱熹の論理は、嚴祭の「碩人」第三章解釋に直結するものであり、兩者の學的繼承關係を見出すことができる。

(36) 元・朱公遷『詩經疏義』にも、「此但指其所易見者、以刺莊公之昏惑而不知耳」を、「朱子曰」として朱熹の説と明示した上で引用される。

(37) 『宋元學案』卷六四「潛庵學案」(黃宗羲全集)第五冊、浙江古籍出版社、一九八五～一九九四)四六七頁。田中謙二「朱門弟子師事年攷」(二十 輔廣)、『田中謙二著作集』第三卷、汲古書院、二〇〇一)二七二頁。

(38) 胡一中の序(劉毓慶『歷代詩經著述考(先秦—元代)』(中華書局、二〇〇二)に據る。

(39) ただし、徐光啓が朱熹の陳古刺今の解釋は引用していないのは興味深い事實である。これは沈守正も同様である。

(40) 劉玉汝の生平については、元代古籍集成經部詩類本、李劭凱・李山「整理說明」に據った。

(41) 主君に諫言する時、主君にとってわかりやすいところから教え諭し、信頼を得ることによって諫言を安全に受け入れさせること。『易』「坎卦、六四」に、「樽酒簋二、用缶、納約自牖、終無咎」とあり、北宋・程頤『周易程氏傳』卷二「習坎、六四」に、「又須納約自牖。納約謂進結於君之道。牖、開通之義。室之暗也、故設牖所以通明。自牖、言自通明之處、以況君心所明處……人臣以忠信之道結於君心、必自其所明處乃能入也。人心有所蔽、有所通。所蔽者暗處也。所通者明處也。當就其明處而告之、求信則易也、故云納約自牖、能如是、則雖艱險之時、終得無咎也……必於所不蔽之事、推而及之、則能悟其心矣。自古能諫其君者、未有不因其所明者也。故訖直強勁者率多取忤、而溫厚明辯者其說多行」(『二程集』、理學叢書本、中華書局、一九八一、下冊八四七頁)と言う。

(42) 前掲拙稿二〇一七年五月、同二〇一八年三月參照。

- (43) 前掲拙稿二〇一七年五月参照。
- (44) 「綠衣」第三章に、「我思古人，俾無訖兮」と言い、『集傳』に、「我思古人嘗遭此而善處之者，以自厲焉，使不至於有過而已」と言う。
- (45) 「日月」首章に、「乃如之人兮，逝不古處」と言い、『集傳』に、「今乃有如是之人而不以古道相處」と言う。「如是之人」とは、朱熹に據れば莊公を指す。
- (46) この言い方は、邶風「終風」首章『集傳』の、「蓋莊公暴慢無常而莊姜正靜自守，所以忤其意而不見答也」と同趣旨であり、この論理をもとにしていられるとも考えられる。
- (47) 『論語』季氏の「嘗獨立，鯉趨而過庭。曰、『學詩乎』。對曰、『未也』。『不學詩，無以言』。鯉退而學詩」に基づく。
- (48) 『集傳』と『詩緝』の解釋の折衷は、元・劉瑾『詩傳通釋』にも見られる。この書は書名からもわかるとおり、『集傳』に基つきそれを敷衍するのを主旨としている。ところが、本詩第三章において、『集傳』の「歎今之不然也」の下に、『詩緝』を引用し「嚴氏曰、君之不答莊姜、惑于嬖妾之故也。而此詩以爲無使君勞……風人之詞婉矣」と言う。本文で見たように、『集傳』と『詩緝』は本来まったく異なった解釋であるのに、それを無造作に結合している。
- また、宋末元初・李公凱『直音傍訓毛詩句解』には「正義」と『集傳』を折衷した例も見られる。本書は、『千頃堂書目』に、「其書專取呂氏讀詩記而櫟括之」と言うのに據れば（『歷代詩經著述考』（先秦—元代）、三三三二頁、元代古籍集成經部詩類排印本、李劭凱・李山撰「整理說明」を參考にした）、『呂記』の解釋に基ついたものであるが、本詩第三章に次のように注している。

莊姜が……齊から〔衛に〕嫁いで来て……衛の國人は莊公がよい連れ合いを得たことを喜んで、故に衛君に朝見する諸大夫は早めに朝見を終え退出した方がよい……主君が政事向きの仕事で疲れて、夫人と相親しむことができなくなると言った。これは莊公が莊姜を相手にしなかったことを指している（姜氏……自齊來嫁……國人樂得爲莊公之配、故謂諸大夫朝君、宜早罷朝退歸……無使君勞於政事而不得與夫人相親、指莊公之不答也）

このうち、「不得與夫人相親」までは、確かに『呂記』に同趣旨の注文が見える（朱氏曰く）としてであるが）。

一方、「指莊公之不答也」は『呂記』には見えない。同箇所鄭箋の「今而不答」とも「今而」がないことから相似ず、むしろ、『正義』の「君何爲不答之乎」「君之不答莊姜……」に近い。

一方で、卒章に次のように言う。

本章は莊姜が嫁いで來た時を追想して詠っている（本章追述莊姜嫁時）

呂記はもとより鄭箋・正義・詩緝いずれも「追述」の指摘はない。『集傳』も本章注釋の中には「追述」の指摘はないが、しかし第三章に陳古刺今であることが言明されている。このように考えると、李公凱の解釋は、正義・呂記・嚴粲と朱熹の解釋との折衷になっていることがわかる。

以上の二例は、注釋者による詳しい説明がないのでその詩經學史上の意義を議論することは難しいが、しかし異質の解釋を共存させる姿勢が廣く見られたということで、本節の考察の參考とするに足るものということが出来る。

- (49) 前掲拙著二〇一七、第十五章第七節で取り上げた小雅「采芣」の『正義』の解釋でも同様の認識の構造が見られる（七〇二頁）。

- (50) 本小節の檢討に關聯して、「言内の意」も果たして多重性を持つことはないかという問いを立てることも出来るであろう。とりわけ、古典中國において、詩篇がそれ自體で獨立した價值を認められるのではなく、儒教の經典たる詩經に收められたことよってはじめに古典として價值を認められたこと、本節第③小節で論じたように、詩經という經典が成立する過程で、詩人の意だけではなく、太師の意、聖人の意も同様に重大な意義を持つていたこと、また本節第④小節で述べたように、詩經解釋學史を通觀すると、詩篇の内部と外部との境界は曖昧で、どこに境界を置くかは、あたかも移動可能な仕切りのごとく、注釋者に據つてかなり自由に設定されていたことなどを考えれば、「言内の意」の多重性は眞劍に檢證すべき問題となるであろう。本稿ではとりあえず問題提起をし、詳しい考察は他日を期したい。

- (51) 嚴密には、歐陽脩は「經師の意」にも正しいものと正しくないものがあり、前者を「本義」、後者を「末義」と區別した。ただし、ここでいう「本義」としての經師の意は「詩人の意」と「聖人の志」を正しく理解したという意味において言っているのでこの二つに從屬し、その他に新たな要素は加わっていないことから、ここでは取り上げない。

こととする。

(52) この問題については、拙著二〇一七、第十四章第5節でも、別の角度から論じたのを参照のこと。

(53) 前掲拙著二〇一七、第三章、一三八頁。

(54) 拙著第十四章第5節で、歐陽脩が「賓之初筵」論の中で、鄭玄が詩の意味を禮制に引きつけて解釋したのは牽強附會で詩の本義から外れたものだ」と批判しつつも、道德的な役割という意味では一定の意義があるので、讀者はそれぞれの判断でそれを採用するか否か決定するのがよいと述べている例を紹介した(同書六四二頁)。これも本稿の議論と關聯させれば、孫鑛の説の先蹤として捉えられるかもしれない。

(55) 前掲拙稿二〇二〇年六月、第6節参照。

(56) 前掲拙著二〇一七、第十四章参照。

(57) 劉毓慶『從經學到文學——明代「詩經」學史論』(商務印書館、二〇〇一)。

(58) 劉毓慶氏は、元代の詩經學を義理の學の支配下にあるものとしている。ただし、氏の研究は詩經解釋が儒教的な要請と思考のもとになされるものから、儒教の羈絆を脱して、藝術性を重んじる觀點からなされるものへと變化していったという歴史的流れを明らかにするためになされたもので、その變換を捉えて「經學から文學へ」をタイトルとしている。元代から明代中期までの詩經學も漢唐から宋代までの詩經學と同じく儒教的羈絆に繋がれた學問という範疇に屬するという氏の主張に鑑みて、ここでは論述を簡明に示すため、あえて「經學」の名の下に呼ぶこととした。

テキスト

●唐・孔穎達等奉勅撰『毛詩正義』(略稱「正義」)

十三經注疏附校勘記(嘉慶二十年江西南昌府學刊本景印)第二冊(臺灣・藝文印書館)に據りつつ、十三經注疏整理本(北京大學出版社、二〇〇〇)第四、六冊を参照した。漢唐詩經學の解釋に基づく詩の訓讀は、主に『毛詩鄭箋』(一)(古典研究會叢書 漢籍之部、汲古書院、一九九二)および清原宣賢講述・倉石武四郎・小川環樹・木田章義校訂『毛詩抄 詩經』(岩波書店、一九九六)を参考にしつつ當該解釋を反映するように行った。

なお、臺灣中央研究院の漢籍電子文獻 (Scripta Sinica) 瀚典全文檢索系統2.0版 (史語所漢籍全文資料庫計畫制作) 所收の『十三經注疏』を、字句の檢索に活用した。

● 北宋・歐陽脩撰『詩本義』

四部叢刊廣篇、據吳縣潘氏滂憲齋藏宋刊本影印本

● 北宋・蘇轍『詩集傳』(略稱『蘇傳』)

續修四庫全書據淳熙七年蘇詔筠州公使庫刻本影印本 (上海古籍出版社、二〇〇二)

● 南宋・呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』(略稱『呂記』)

四部叢刊廣編04、據常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刊本影印本

● 南宋・朱熹『詩集傳』(略稱『集傳』)

四部叢刊廣編04、據靜嘉堂文庫藏宋本影印本

● 同『詩序辨說』

『朱子全書 修訂本』第一冊 (上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇一〇)

● 南宋・輔廣『詩童子問』

詩經要籍集成 (學苑出版社、二〇〇二)

● 南宋・楊簡『慈湖詩傳』

『楊簡全集』第二・三冊 (浙江大學出版社、二〇一六)

● 南宋・嚴粲『詩緝』

據明趙府味經堂刊本影印本 (臺灣・廣文書局、一九七〇)

● 元・朱公遷『詩經疏義』

元代古籍集成經部詩類 (馬天祥・徐逸超・邢毓南點校、北京師範大學出版社、二〇一三)

● 元・劉瑾『詩傳通釋』

元代古籍集成經部詩類 (劉鎡碩・李墨宇・馬千惠點校、北京師範大學出版社、二〇一三)

- 元・劉玉汝『詩續緒』
元代古籍集成經部詩類（李劭凱・孫慧琦點校、北京師範大學出版社、二〇一二）
- 明・徐光啓『毛詩六帖講意』
鄧志峰點校本（徐光啓全集、上海古籍出版社、二〇一一）
- 明・沈守正『詩經說通』
據明萬曆四三年刻本影印（詩經要籍集成二編第十七冊、學苑出版社、二〇一五）
- 明・孫鑛『批評詩經』
據明末天益山刻本影印（詩經要籍集成二編第十三冊、學苑出版社、二〇一五）
- 明・鍾惺『詩經鍾評』
國立公文書館內閣文庫藏本影印、2371200
- 清・賀貽孫『詩觸』
詩經要籍集成二編據清刻本影印（學苑出版社、二〇一五）
- 清・戴震『毛詩補傳』
安徽古籍叢書『戴震全書（修訂本）』第一冊（黃山書社、二〇一〇）
- 清・陳奐『詩毛氏傳疏』
據漱芳齋一八五一年（咸豐元年）影印本（北京中國書店）
- 『文淵閣四庫全書電子版——原文及全文檢索版』
上海人民出版社・迪志文化出版有限公司

*本稿は、蔣經國國際學術交流基金會補助（一百零八年度第二期）による共同研究「作爲方法的『言外之意』——結合『詩經』尊（序）與廢（序）的態度比較」の成果である。